

終に海外に輸出するに至つた。安政五年工人庄三、友三等山代村の傍に新窯を開き、金襴様キンランヤウを製し京都の工人永樂善五郎和全を迎へて改良を圖らんとしたけれども、意の如くならず。明治に至り京都の人池田清助の考察によつて輸出向の製品に力を用ひ、陶業大に進歩し今日の隆盛を致したのである。

2 蓬萊島。支那にて東海に在りて仙人の住めりといふ。神山蓬萊山といひ山形壺器に似たるを以て蓬萊と稱す。方丈、瀛洲と併せて三神山となす。蓬萊は始めて列子湯問篇に

渤海東、壑中有五山、一倍與二員嶠三方壺四瀛洲五蓬萊と見え、其の後史記封禪書に

三神者在渤海中、蓋嘗有至者、諸仙山反不死藥在焉。其物禽獸盡白、而黃金、白銀焉。宮闕未至望之如雲、及到三神山反居水下、臨之風輒引船而至、終無能至

とあり、漢書郊祀志また此文を載せ、山海經には「非有道者不至」と見えたり。蓬萊はもと想像上の仙山に外ならずと雖ども、古來神山の説大に行はれて秦の始皇は徐市を遣はし、不死長の仙藥を求めしめし事史記に見え、徐市東海に浮びて日本に到り遂に留まりて還らずと言へり。かくて蓬萊を我國土内に求めて徐市往來の地を以て或は熊野となし、或るは富士山となし、或るは熱田となし、世にこれを蓬萊と稱す。その他或るは加賀白山、攝津の住吉、安藝嚴島を以て蓬萊に擬し、或は伊豫三島は昔蓬萊、方丈、瀛洲の三島淨び出でたるによりて名づくなど云へり。(百科辭典)

第四十一圖 琵琶湖と大津 (第五十七頁)

一、主眼

琵琶湖及び大津市の挿繪を觀察せしめ、擴張蒼渺たる琵琶湖を想到せしめる。尙、琵琶湖が自然及び人生に與ふる利得について知らしむ。

二、解説

1 此の挿繪は大津市の後背、長良山、園城寺―三井寺の一部から大津市をかけて琵琶湖の一部を望んだ所である。

山下に麓を接する郡邑は大津市で、前方、海の如きは湖面で、其の向ふは琵琶湖の東岸、長命寺山等の近江の山々である。

2 大津市街の中央に湖から續いた溝渠の如く見えるのは京都に通ずる疏水の入り口である。又、疏水の左方、湖中に突出せるは第一疏水の始めである。更に左方遙か湖中に伸びたるは、柳ヶ崎である。

3 大津市から湖岸に傳つて西へ廻れば唐崎、坂本に至る。此からは比叡山に登る事が出来る。圖に見える遠方右方の山は其の一部である。又、大津市は此の圖よりも更に右方に長く伸び、粟津、勢多に續いてゐる。此の圖の左方には大津聯隊の練兵場がある。

此の圖に表はれてゐる琵琶湖は、湖の全景でなくて、僅かに湖の西部の一部である。しかも幅の最も狭き所を描いたので、湖は是れから奥へ長く續いてゐる。

4 大津市。

滋賀縣近江國琵琶湖の西南岸に位置する都會で、西に長等山を控へ其の山麓から東北に向つて傾斜し、階段状をして湖に迫つてゐる。市街は東西三十町、南北十五町。人口五萬弱。一度此の都に三井寺へ遊ばんか、煙水渺茫遠く湖東湖西の連山を望む事が出来、山紫水明相映じ、與に共に風光の絶佳、人をして觀賞の念に打れしむ。

5 琵琶湖。

琵琶湖は近江國の中央に位し、日本第一の湖。其の形が琵琶に似て湖岸線の全長は五十九里三十二町。長徑十六里九町四十五間。幅五里二十町四十九間。面積四十四方里。海拔二百八十四尺九寸の高所。京都市の中央より高さこと百三十尺。此の湖は陷落湖であつて、湖中には、今尙、其形見とも見るべき、而かも湖岸と地質を同じうする島々がある。即ち、竹生島、多景島、沖島、奥島、白石島等で其の絶景は繪の筆も及ばぬ程である。又繪周には近江八景とて秀れた所が多いから遊覽客は引きも切らぬ。大津附近の湖上には數多の遊覽船が通航して之らの人の便に供して居る。又明治四十一年から向ふ十一ヶ年繼續事業として、毎年一萬圓の費用で鯉、鱒、鰻の魚仔を放つてゐるから、近き將來に於て利源が開發せられるであらう。現に漁業船多く、湖面には一萬三千ばかり浮んでゐる。汽船の總數は二十三。

6 湖水の排水口は一は疏水、一は洗堰であつて、前者は平均一秒間に三百立方尺、後者は一秒間に九千九百九立方尺流出する。洗堰は、常に水の加減をして流出せしめ、水位を一定に保たせ、河下なる京都府、大阪府は勿論、滋賀縣の水害を除くために、明治二十九年から同三十九年の間に費用三十萬圓を投じて作つたものである。又、疏水は、一秒間に三百立方尺流出するのみでは、一箇月に湖面を一寸低下することが出来るだけだと。湖水の如何に大なるかを想像することができる。

7 第一築地。

其の場所は、三保崎である。此の附近には飲料水の濾過精製所がある。本所は十五馬力の電力で湖水を吸ひ上げ、精製して附近の人家に供水する。是れは以前長等山の一部又は掘井に依つて、用を辨じて居たものを疏水が出来た爲め、斯くの如くなつたのである。此の疏水は種々方々の電源に用ひられてゐる。

8 第二築地。

大津市の大凡中央三保崎の右方にある。茲には製材所及三井寺下船乗場がある。此の船は湖南汽船會社の所有で湖南の交通に供せられてゐる。南、第一築地の左には第三築地作らる。

9 疏水。

疏水は三保崎から起り、三井寺の下を通り、それから一里餘のトンネルを通つて、山城國山科村に出

で再び十餘町のトンネルを経て、京都市の南禪寺附近蹴上げに達してゐる。此の蹴上に舟溜所があつて更にインクラインに依り、上下の交通をするのである。

此の疏水は、大津より米や貨物を京都市に送り、又水力電氣を起す用に供せられてゐる。

三、活 用

1 特に留意して觀察せしめる事項。

(イ)、大津市。

(ロ)、湖 面。

(ハ)、疏水の入り口(築地)

2 森漠蒼渺たる琵琶湖を想像させるやうに説話補加せよ。

(イ)、本圖は琵琶湖西部の一部で、しかも幅の最も狭い所。

(ロ)、遠山の間から蒼渺廣大の湖面を視眺し得。

(ハ)、疏水から流出する水量。

(ニ)、近江の國と對比。

(ホ)、湖周、湖の徑

3 湖の自然及び人生に與へる利益を觀察に依つて覺知せしめよ。

特に(ハ)の如きは、時間を惜む事なく説明を加へ水力の威大なることを知らしめると共に、自然水の利用法を考究するの素因を與へるがよい。

4 大津市の發達と琵琶湖との關係や、將來に於ける琵琶湖の水の利用等に就いて、兒童をして想像をめぐらしめるも面白い。

四、參考資料

1 疏水の入口の上には三つの橋がある。最も此方に釣橋の如く見えるのは、鹿關橋で長さ七間三尺、幅二間三尺。鹿關町通りに當つて居る。次の橋は北國橋。次の琵琶湖に最も近いものは、三保崎町橋とて中保町通りで西近江路の本通りに當つて居る。

2 疏水入口の水上に黒點の浮んで見えるは、曳船である。此の船は京都曳船會社(資本金三萬圓)の掌る所で、客船は屋形船である。流水に従つて下る時は、三保崎から京都南禪寺まで約二時間(二十錢位)を要する。船中には只一つの灯を付け、船頭の船音勇ましく、船歌と合して進み行くのも船中

の無聊を破るの思ひがある。又上り下りの舟が途中で出遇ふのも興がある。

3 疏水入口の湖に近い所には閘門がある。茲には二個の鐵の扉があつて、其の間へは船を縦にして入れるに十分である。之れは湖から疏水へ、疏水から湖へ出入する船のために用ひるのである。即ち兩水面に差があるから直ちに通過する事が出来ぬ、そこで此の兩扉に依つて水面を等高にし、而して後に船をやるのである。

4 近江八景。

比良(海拔四千尺)の暮雪。堅田の落雁(浮見堂あり)。唐崎の夜雨(周圍五尋、高さ三丈の古松あり)。三井寺の晚鐘。粟津(膳所から瀬田までの湖岸、源義仲戦死の地)の晴嵐。瀬田の夕照(大橋九十六間小橋三十三間)。石山の秋月。矢走の歸帆。

5 湖面は京都市より百三十六尺の高所であるから、疏水によつて京都へ至るも尙、百二十尺の落差がある。京都市では之れを利用して、發電所を起し、電燈、電車、機械に電氣を送つて居る。又、勢多川を石山寺の南、南郷の洗堰で分水し、之れを宇治の朝日山頂(久世郡宇治町大字宇治郷)に導き、落差二百五尺、常用二萬五千七百七十キロワットを與ふる宇治水電氣を拵らへてゐる。

第四十二圖 天橋立 (第五十九頁)

一、主 眼

日本三景の一たる天の橋立の風光の秀美を觀察せしめ、且、砂嘴の一般を察知せしめる。

二、解 説

1 天の橋立は、京都府下丹波國與謝郡府中村字江尻から南西微南に向つて突出する砂嘴である。一帯の蒼松白砂、液面に映じて、宛も天上橋あるに似てゐる故、此の名があるのである。一名子日岬ともいふ。松島、嚴島と共に日本三景の一つである。

2 本挿繪は、與謝郡府中村なる成相山傘松附近から天の橋立を俯瞰したものである。圖の左隅の村落は府中村。前面の中央は田畑。右方の森林は傘松の一部である。

斜に入灣を横切れる一文字成りの松原つゞきは天の橋立である。其の盡くる所は文珠の切り通しで、茲から海水が内灣に通するのである。宮津町は文珠から東方約二十町の對岸にある。對岸に見えるは杉山一帯である。

3 天の橋立は長さ一里七町、幅の最も狭い所は約二十五間、最も廣い所は六十間。此の長嘴は與謝海の中部に横はつて、此の海を内外の二灣に分つてゐる。内海を岩瀧湊(古名、安蘇海)といひ、外海を宮津灣といふ。文珠の切戸(古名、久志の渡)といふ狭水道(濶三十間、深さ一尋)を隔て、文珠村久志濱砂嘴と相對してゐる。又内外の濱といふ橋立の一部に橋立神祠がある。其の傍からは清泉が

へ、舞鶴をさして急行せねばならぬ。舞鶴線は、軍港と天の橋立の爲めに直通列車があつて、京都からは四時間、大阪からは五時間で舞鶴に達する。舞鶴からは汽船で天の橋立へ行くか、陸路によりて、馬車、人力車の便をかるかである。舞鶴から汽船に乗つて舞鶴灣の風光を稱揚しつゝ、日本海に出るとして、再び宮津灣——與謝海に入ると、忽然、前面に一帶の蒼松が繪の如く白砂と映じて、海面に浮んで居るのが眼に這入る。是れぞ天の橋立である。橋立を右手に望みつゝ、間もなく着くのは、宮津港である。宮津港は、特別輸出港の一つで、丹波縮緬、繭、絹織物、海産物などがある。

二度と行くまい 丹波の宮津

縞の財布が空になる

宮津から天の橋立を眺めるよりも、別に船を仕立て、白砂青松の汀に添ふて絶景を賞観するがよい。しかし乍ら眞の橋立を眺め賞美せんとならば、船によつて近づくよりも、一層、遠方から全景を眺める方が多趣深妙である。成相山からの眺めは俗に天の橋、股ぐら鏡と言つて、所謂天の橋立を觀る事が出来る。といふは、橋立を背にして立ちながら、身を屈め、己の股の間から覗いて天橋立の景を眺める、すると一帶の翠松は波に映つて水中に天あり、天上に水あり、上なるが海か、下なるが天か、識別し難い無雙の景色である。依つて此の股ぐら鏡の名が天下に響いたと思はれる。但馬國城崎に至る街道の栲峠からは横一文字の景が眺められる。そして向ふには宮津町が見え、其手前には文珠の切

戸あたりをならんで通る白帆、上には由良岳、大江山などが迫つて見える。宛も一幅の畫面である。

2 橋立神社の附近は、岩見重太郎が父の仇を討つた所とか。文珠の渡を渡つた所には智恩寺がある。尙、此には、文珠閣がある。

第四十三圖 四國の海岸より望める鳴門海峡 (第六十頁)

一、主眼

鳴門海峡の全景を觀察せしめ、潮流の急なることを知らせる。

二、解説

1 此の挿繪は、徳島縣の撫養から二里、大鳴門の觀望に富む鳴門公園(大毛山)下から描寫したものである。手前の島は公園の島で、海峡の向ふに見えるのは由良岬で、遠山の一連は紀州の山々である。繪に見える瀬戸が干満潮の際、一間からの水差を生ずるので、所謂鳴門の眞景を見る事ができるのである。

2 鳴門海峡は、阿波國板野郡大毛島の東北端孫崎と、淡路三原郡門崎との間なる海峡で、其の幅は

鳴門海峡の圖



二十町許りである。しかし、孫崎の側に裸島があり、門崎の前方には中の瀬礁があつて主要水路の幅は僅かに五町に過ぎない。此の主要水路が大鳴門(挿繪に見える海峡)で中の瀬と門崎との間が小鳴門である。

3 淡路島の鳴門岬は長く突出して其の先端を行者が鼻といふ。お鼻の附近一帯は、怪獸のうそぶく状した巖や、屏風を立てたやうな

大巖が其處にも此處にも突立つて壯觀の限りである。

4 大鳴門海峡の中間には大小無數の岩があるが、潮が満ちると此れ等は全部暗礁となつて少しも見分けがつかない。此の邊は百俣もありさうな深瀬である。瀬から少し離れた所には飛鳥といふ大きな巖がある。此の島には枝ぶりのよい面白い磯なれ松が生えてゐる。その上、波間に潜る鵜、岩根に休む鷗などが飛び交つて壯觀絶景である。

三 活用

1 此の挿繪は潮流の速いのを示さんがために出したものであるから、觀察に當つては、

(イ)、極めて狭い海峡。

(ロ)、大鳴門海峡の間の岩礁。

(ハ)、海水の様様。

等に留意すべきである。但、此の挿繪は干満潮の時でなく比較的、平靜の時を描いたものであるから「鳴門海峡は潮流の急なるが故に其の名著る。」を知らせるには少々不満の感がある。そこで他の適切な掛圖、繪葉書を使つて、十分に此の目的を達すべきである。

2 従つて、此の挿繪に對しては補加説述を要する。

「鳴門海峡の北は播磨灘、南は紀伊水道にて、潮汐干満の時刻を異にするため、顯著なる潮流を生じ、一晝夜に二回は外洋に、二回は内海に向つて流る。其の速度七乃至八海里に達し、春秋の大潮には、十一二海里に及ぶ。急流潮の際は中央幅二三町間に河川状の急流をなし、其の兩側に、渦流を生じ、水面窪みて、漏斗状となる。其の音轟々として、遠雷の如し。内外水面平均すれば所謂憩潮となりて流速皆無となる理なれども、實際は大鳴門の主流未だ息まざる間に小鳴門より、逆流し始めて、次第に反對の流向に變じ全然静止する事なし。」(日本百科辭典)

3 尙ほ、此の挿繪を四國の部屬とせず、茲に掲げたのは、交通上、近畿地方との關係が多いからである。故に交通の要路たる事を力説せなければならぬ。要するに此の挿繪は、交通及び地勢に互つて

活用すべきものである。

4 交通に連關して、此の海峡の航行困難を説明するがよい。(此の海峡に於て潮汐干満の極度には、一般の船舶は碇泊し、水差が一間以下になつてから通航するのである。但し水雷艇のみはどんな時でも此の瀬戸を通る。)

5 尙、此の一帶は要塞地帯であるから此の事を一言し、更に何に故、此が軍事上大切なるかを探究せしめる事も一層面白いと思ふ。

四、參考資料

1 退潮の時は、外洋は速かに潮を引くが内海は遅いので、水が一時に滯り内海の水は高く、一方は低く、此に一間以上の水差を生じ、瀬戸内海の水は、此の門戸に集來して急潮流となるのである。潮の瀬は孫岬に衝り、鳴門岬を洗つて更に横に折れ、中の瀬を突く。すると中の瀬の巖の下の深淵には、一度落ちた潮が底からぐらぐらと煮えかへつて、宛も鼎の沸くが如く、忽ちにして大渦が出来る。其の渦の大きさは、徑が三間位もあつてぐるぐる廻り、更に狂瀾怒濤が巖に碎けて、奈落の底に到らんと思はれる。

2 要塞地帯。

要塞の築城せる部分の周圍に於ける一帯の地域の稱。其の幅員は、防禦營造物の各突出部を連結する

線を基線とし、外方一定の距離以内にて是れを定め、是れを三區に分つ。各區の幅員第一區は基線より二百五十間以内の區域及び、基線と防禦營造物との間に在る區域。第二區は、基線より七百五十間以内の區域。第三區は基線より二千二百五十間以内の區域にして、又第三區界外方、三千五百間の區域も前者に準じて、其の制限を規定してある。

明治三十二年七月法律第廿五號を以て要塞地帯法を公布せられ、同三十三年六月に陸せらる。要塞地帯軍省令第十四號及海軍省令第十六號を以て、要塞地帯法施行細則を改定し、翌七月一日より之を施行す。於て、不燃質物(金屬、煉瓦、石、土及之れに類するもの)の建築、地形變換、道路(國道、縣道、及道幅二間以上の公共道路)及び是れに架設す橋梁、鐵道の施設變換、地物の圖畫、寫真影形等の制限を規定し、此の禁を犯したるものは、各犯狀によりて、有期懲役、罰金、科料等に處罰せらる。(日本百科大辭典による。)

要塞には要塞砲兵——今は重砲兵と改稱してある。——が居る。

我が國の要塞のある所は、東京灣。由良。廣島。佐世保。下ノ關。舞鶴。藝豫。函館。基隆。澎湖島。對馬等である。

第四十四圖 山陰線の高架橋 (第六十一頁)

一、主眼

山陰線の高架橋を觀察せしめると共に、山陰線工事の難關と、文化の恩澤を感得せしめる。

二、解説

1 本挿繪は、兵庫縣但馬國城崎郡の鐵驛より西二十六町、久谷驛より東四里半なる餘部村の鐵橋である。川は餘部川といふ小川であるが、此の鐵橋は此の川の爲めに架したのではなくて、向つて左の山腹から出で、向つて右のトンネルに入る傾斜の都合上及び村民の堤防反對の爲め、かくは鐵橋を架したものである。此の圖は南方から北方(海岸)を眺めたもので、汽車は今や西に向つて、宛然空中を駆けるが如き奇觀を呈して進行しつゝある。

2 圖の中央を流れてゐるのは餘部川で其の兩岸は田地である。向ふに見える人家は餘部村落の一部で、其の人家中特に高く聳えて見える家屋は本村の學校分教場で、遙かなる水面は日本海である。車中から此の谷間の民屋、田圃を瞰俯すれば眩惑するの感がある。

3 此の陸橋は高さ百三十三呎(二十二間四尺)、長さ千九百七十間五尺)。汽車の通過に要する時間三分時。工事は三ヶ年。工費四十七萬四千四百十五圓。橋脚は米國式で鋼材を用ひ、六十呎鋼板桁十一と三十呎鋼板桁十二から成る。

三、活用

1 壯大頑丈なる鐵橋を觀察せしめ。

(イ)、鐵材のみ使用

(ロ)、人家、山と比較して其の全長と高さ。

(ハ)、汽車の通行。

かくて文化の恩澤を感得せしめるがよい。

(イ)、人工に依つて高架空橋を作る事。

(ロ)、交通を便にせること。

2 山陰線の難工事であつたことを想像させよ。此の圖に此の難工事を示す事と、かゝる嶮岨の地方も今日は交通が便利となつたといふ二目的を以つて挿入せられたものである。故に、

(イ)、是の鐵橋を作る苦心。

(ロ)、漠大なる工費。

(ハ)、京都鳥取間のトンネル數六十餘。

等に就いて附帶説明せよ。

3 交通に關しては特に力説し、此の挿繪の眞價を發揮せなければならぬ。裏日本特に山陰一帯は地勢嶮岨にして、交通が不便である。従つて文化の程度も劣り、政治上の不便も伴つてくる。世を文明

にし、時代の進歩に後れしめざらん爲めには、交通を便利にする事が切必である。此の山陰線の開かれざる以前は、山陰一帯、文化、文明の後進劣等者であつた。所が今日は此の鐵路の賜を以て、全國平等なる文化の恩澤惠與に浴してゐる。此の意味に於て此の餘部高架橋は、交通の要路にして、其の重きを致してゐるものである。即ち此の鐵橋は、奇觀を以て有名な許りでなく、交通運輸の大立て物である。

四、參考資料

1 交通の便を得しめる爲めに河川、運河其他の水路、窪谷、道路、鐵道を横きつて架した構造物を橋梁といふ。木材、石材、鐵材、煉瓦、コンクリート等で構造せられ、下部構造、上部構造の二部から成立してゐる。橋梁を目的の上から分類すれば、公道橋(High-Way) 鐵道橋(Railway) 水道橋(Aqueduct) 軍用橋(Military bridge) の四種に分れる。構造材料からせば、積工橋(Masonry bridge) 鐵筋混凝土橋(Reinforced Concrete bridge) 木橋(Wooden bridge) 鐵橋(Metallic bridge) の四種となる。構造上の型式によつて、桁橋(Beam bridge) 吊橋(Suspension bridge) 拱橋(Arch Bridge) の三種に分れる。鐵橋は主要部分を鐵材で作つた橋梁。

2 山陰線は起點を京都に發し、西に走つて、中國地方の北日本海を廻り、濱田、津和野を経て山口に出で、後山陽本線に合せんとするのである。現在は島根縣の大田までしか通じてゐない。汽車が京

都を出て、保津川の溪谷に沿ひつゝ、山陰に入ると綾部で北に舞鶴線を岐げ、本線は西進し、福知山で福知山線、和田山で播但線に合して居る。茲から北進して温泉に名高い城崎を過ぎ、竹野驛邊からは日本海の青波を望む事が出来る。日本海に沿つて西進する間には、狂瀾怒濤の岩に激する壯觀、奇岩怪石の景趣に接するのである。やがて餘部の大陸橋を渡り、次いで鳥取縣に入る。

第四十五圖 淀川の下流 (第六十二頁)

一、主眼

淀川の下流(安治川)に於ける入船、出船の幅湊せる有様を觀察させ、如何に淀川が交通の要路便通の衝であるか、如何に大阪は商船殷盛であるかを推知させる。

二、解説

- 1 此の繪圖は、大阪市西區下福島町船津橋附近から川下に向つて、安治川を挿み富島町及び安治川通りを寫したものである。
- 2 眼界に入る川は淀川(下流は安治川と木津川とに分れて居る。本圖は安治川の上方)である。川上に浮ぶ數多の汽船は全部、大阪商船會社の所有である。——煙突の記號でわかる。又、川中を右往左操せる和船は安治川の渡船である。又、汽船の間に橋の見える和船は運送船で

ある。

挿繪の左方は富島町の一部で、川の中央向ふに當つて屋上に尖塔の見えるのは、大阪商船會社である。其の手前左方の建物は、税關と税關の荷揚所である。

河を隔て、本圖の右方は、安治川の左岸安治川通りの一部である。夫の建て物は、住友倉庫である。

3 此の附近は、安治川を溯る事凡そ五十町である。昔から所謂入船千艘出船千艘とて、船舶の輻湊中心地である。此所に居る船は多く二三百噸位から七百噸位である、此の川は幅も廣く、深さもあから圖にも見えるやうに渡船が往來し、數ヶ所に渡船場が設けてある。

4 淀川。

山城國宇治、桂兩川の合流であつて、淀町の北方で相會し、南流八幡町に至つて木津川を合せ、攝津河内の國境を流れて大阪に這入る、大阪では船津橋、瑞藏橋邊りに於て、安治川木津川の二派に分れて大阪灣に注いでゐる。流域淀町から八里三十三町。水源地から十九里二十五町。

5 西區。(安治川一帯)

西横堀川以西の諸島地、安治川、木津川沿岸の地を包括する。近時は此兩河間の新田地及び其の西海岸築港埋立地をも編入するに至つた。豊臣時代には唯洲渚蘆葦の間に横はつて居たが、徳川氏三百年の太平に漸次修築せられて陸土となつた。水運到る所至便なる故、運漕倉庫業を營むに宜しく、附近此

の種の事業に關係して商買が多く榮えて居る。又、安治川沿岸一帯は、徳川時代には、藤屋敷が櫛比して居たが、今は皆廢れて、其趾は公署、學校、會社が設立されてゐる。

6 大阪商船株式會社

明治十七年五月の創立にして現在資本金は一千六百五十萬圓。支店を大阪、神戸、宇品、下關、多度津、門司、別府、長崎、鹿児島、基隆、淡水、安平、打狗、澎湖島、釜山、木浦、仁川、鎮海浦、上海、漢口、香港等二十七ヶ所に置いて居る。

本社は、初め關西航運業者が數十名相集つて百餘の汽船を纏め、資本金百二十萬圓を以て創立開業した。日清戰役には三十餘隻一萬二千五百餘噸を軍用に供した。戰後益々其の活動範圍及事業を擴大し三十二年には政府の補助を得て、清國に手を伸べ、爾來愈々會社は擴大張進し、清韓の運送業に加はつた。日露戰爭には、七十三隻七八、八八〇噸を政府に提供し、此戰後一層、其の事業を擴大した。即ち、内地航路は勿論、清、韓、臺灣、ウラジヤストック、アメリカ、南洋、歐洲、印度等殆んど全世界の航運に従事してゐる。

三、活用

1 小局の繪面に、大阪市と他の都市との頻繁にして極限なき交通の様子を表はさんとして、此の挿繪を選らんだものであるから精細なる觀察に依つて、其の活用を擴汎に互らしめなければならぬ。觀

察要項を擧げて見ると。

(イ)、淀川。(安治川)——廣深。

(ロ)、幅湊せる船舶。

(a) 汽船(數多の汽船は全部大阪商船の所有である。煙突に六の記號がある。)

(b) 橋を有する和船。

(ハ)、渡し船の數々

(ニ)、税關と其の荷揚所。

(ホ)、大阪商船會社。

(ヘ)、住友倉庫、

かくて商業交通盛況の一斑をうかいはしむ。

2 淀川下流は大阪市内の交通を以てさへ頻繁複雑にして其の要路たるが上に、他の都市との交通の要衝たる事、及び淀川と大阪との關係乃至淀川と將來の大阪の運命に關しては力説せなければならぬ。特に目今の如き通商貿易の盛大なる時に於て、而かも大阪は其の盛況の中心地なるを以て、一層此の必要を感ずるのである。

3 大阪商船會社の事業に關しては、數言を要せなければならぬ。而して其の説話中には、

(イ)、通商貿易。

(ロ)、海外發展策。

(ハ)、國家的觀念、國民思想の擴充。

(ニ)、富國策。

等の教授を挿むがよい。

是れは時代の要求から見、將來の我が國を慮りて切要の事である。

四、參考資料

1 税關。

大藏大臣の管理に屬する官廳の一。税關は是れを横濱、神戸、大阪、長崎、函館に置く。其職務は(一)關稅、噸稅及び税關諸收入に關する事項。(二)保税倉庫其の他の倉庫に關する事項。(三)船舶及貨物の取締に關する事項。(四)關稅法及噸稅法犯則者の處分に關する事項。(五)酒類造石稅醬油稅下戻に關する事項。(六)關稅通路の取締に關する事項。(七)税關又は保税倉庫より引取らる、砂糖、織物の消費稅及骨牌の課稅に關する事項。(八)移入に關する事項是れ也。

2 税關假置場。

陸揚したる外國貨物を假に藏置する所。假置場に關しては、明治三十三年四月法律第八二號税關假置

場法の制定ありて、(一)假置場に藏置すべき貨物の種類は大藏大臣に於て是れを制限し得ること及、藏置貨物は輸入せざるものと看做す。(二)藏置期間は原則として三ヶ月間とし、其の期間を経過したる時又は藏置貨物の輸出を命せられ乍ら税關長の指定期間内に輸出せざる時は、關税法に依り是れを收容する事。等を規定せり。(百科大辭典)

第四十六圖 大阪市内の工場 (第六十三頁)

一、主眼

煙突の林立せる本圖を觀察させ、工業の盛大なる様を知らしめ、「煙の都」「日本のマンチエスター」と稱せらる所以を悟らせる。

二、解説

1 本圖は砲兵工廠附近の高地から此區一帯を望んだ所である。其の煙突の林立し黒煙天を覆へる様は眞に「煙の都」たるの名に耻ぢず、日本第一の工業地たるを思はしめる。
2 晩近工業上に於て一大發展をなし、市内の工場は溢れて四近の平野に及び、煙突林立し黒煙天を覆ふの壯觀を呈してゐる。斯くて工業の成大は全國に冠絶し其工場数は二千に達するの盛況である。殊に其の特色とするところは綿絲紡績業で、大阪市を一に「日本のマンチエスター」と稱するは實に

これによるのである。

今市内に工場を有して居る會社を掲げて見ると。

會社	場所	錠數
攝津紡績株式會社木津川工場	南區	五二、九一二本
大阪合同紡績株式會社天滿工場	北區	六三、〇七六
福島紡績株式會社本社工場	北區	一七、八四〇
天滿織物株式會社本社工場	北區	二三、六一六
尼ヶ崎紡績株式會社福島工場	北區	六六、九〇八
東洋紡績株式會社三軒家工場	西區	五五、四五六

以て其の盛業が窺はれる。

猶其の外織物工場、マツチ製造工場、硝子製造工場、硫酸製造工場、鐵工場、造船所等殆んど數へ盡されぬ程である。

3 大阪市内に於ける高さ拾間以上、石炭を燃料とせる工場の煙突數を擧ぐれば今や民有のみにて九百五十基を越え、これに官有の砲兵工廠及び造幣局の約五十基を加へると千基以上である。今若し十間以下のものを加算すると數千の巨數に上るといふことである。

千葉	一七一	宮城	一九四	茨城	一二一
福島	一八二	巖手	一〇一	徳島	一四九
青森	五〇	香川	一二一	山形	三〇四
愛媛	二五六	秋田	七八	高知	一六四
福井	五五三	福岡	三五〇	石川	四六一
大分	七一	富山	一九九	佐賀	八七
鳥取	一〇九	熊本	一一四	島根	九七
宮崎	七〇	岡山	二七五	鹿兒島	二四〇
広島	三三一	沖繩	五八	山口	一一八
北海道	三七三	和歌山	二三九	計	一九、二九九

二二六

第四十七圖 大阪にある紡績工場の内部 (第六十四頁)

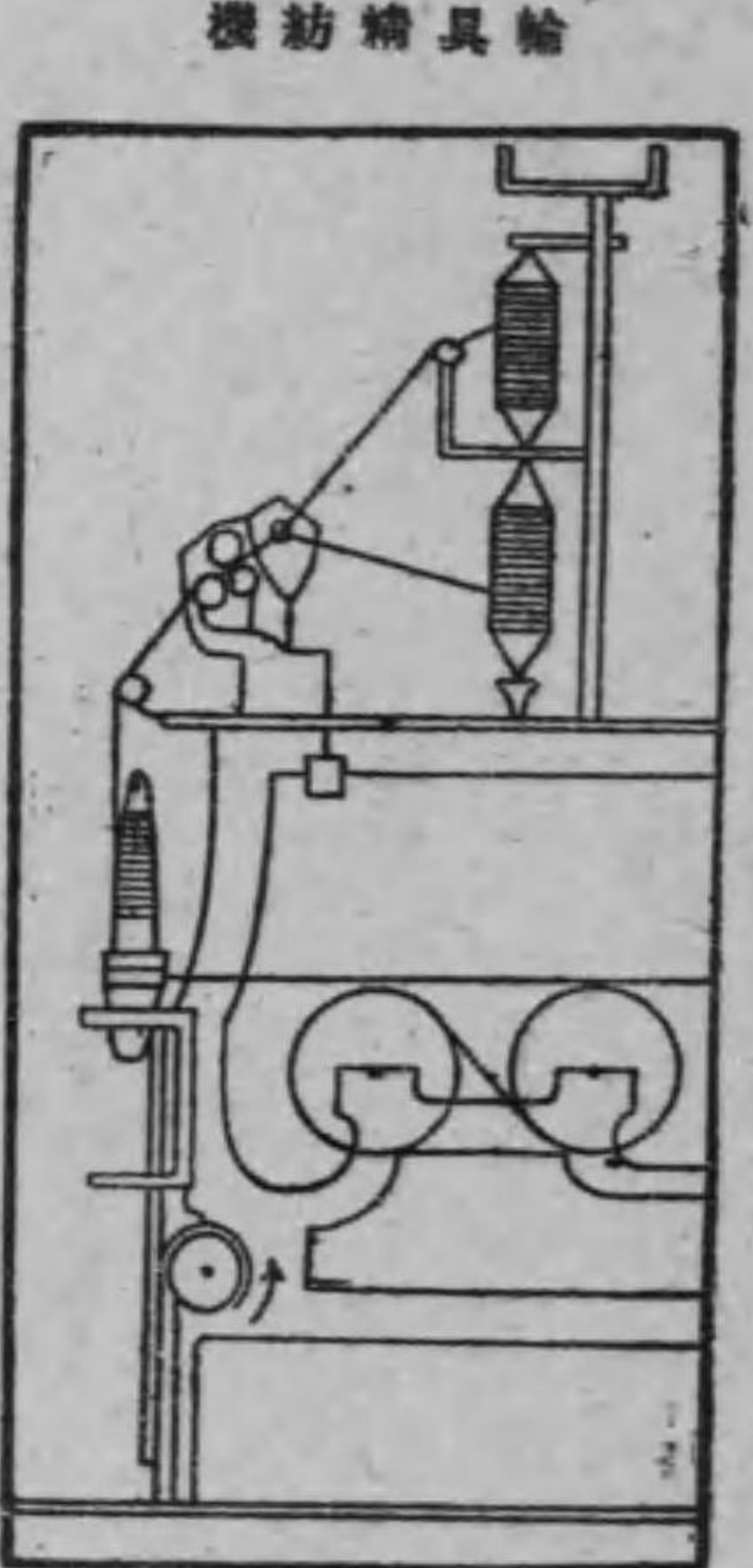
一、主眼

本圖を觀察せしめて綿絲製造の規模の大なることを知らしめる。

二、解説

1 本圖は東洋紡績會社紡績工場内部の景で、精紡機の整列を現したものである。精紡機は片撚絲を造る機械で更に片撚絲若干を合せて撚絲法と稱する工程を経て綿絲製造工程を完了するのである。

2 圖中見える精紡機中は輪具精紡器で女工の頭の通りに數百本の二列横列の白色紡錘形のは粗紡機により巻きつけられた紡錘である。この紡錘の絲は器械の廻轉につれ三對の轉子によりて適當に牽伸せられ更に下方の紡錘の回轉と輪具の作用とによつて撚掛けられ、下方の紡錘に巻付けられ



るのである。猶其の要部を圖解すれば挿圖の如くである。

- 3 綿絲紡績の工程順序を示すと大體次の如くである。
- I 混綿機によつて印度綿又は亞米利加綿の各等級を適當に混綿する。
 - II 打綿機によつて綿を打ち塵埃を除去し蕪狀の綿帯を作る。
 - III 梳綿機によつて綿の纖維を梳り塵埃及び短き纖維を除去し棒狀の綿を製す。

- IV 練條機によつて數本の綿棒を合せては延し、合せては延し其の大きさの平均、纖維の平列と同時に塵埃を取去る。この工程は凡そ三度練條機にかける。
- V 粗錘機によつて棒狀の綿を延して撚をかける。此れも凡そ三度やる。
- VI 精紡機によつて適當の大きさに引延し、適當の撚を掛けて初めて絲となす。
(挿繪はこれである)
- VII 撚絲によつて二本三本四本五本と絲を合せて撚を掛け撚絲を拵へる。
- VIII 總機によつて出來上つた絲を總にする。

三、活用

- 1 本圖を觀察せしめて紡績工場の規模の廣大なることを知らしめねばならぬ。然し其の工場の規模の廣大なる様はこの繪のみでは不足である。大いに他の繪葉書掛圖等を用意して知らしめるがよい。
- 2 此の圖を中心として、紡績手續の概要を知らせよ。(其の説明は解説参照)
- 3 我が國古來の紡績業と今日のそれとを比較させ、紡績工業の進歩發達の程度を想定させよ。

第四十八圖 綿絲產額比較表 (第六十四頁)

一、主眼

本表を讀解せしめて近畿地方の綿絲產額の概要を知らしめ特に大阪府の我國に於ける地位を覺らしめる。

二、解説

- 1 本圖は我國綿絲の年產額を約九千萬貫と見てこれを一長方形で示し、これを十區劃の目盛を附け、以て各地方の產額を示したものである。
 - 2 今この表圖によつて各地の產額を見るに一區劃は九百萬貫であるから、大阪府の三區劃は約二千六百萬貫でこれを全國の總產額に比すると約三割の割合である。(二一四頁参照)
 - 兵庫は一區劃四分程に當るので千三百六十萬貫、其の他京都、奈良、三重、和歌山等は推定せよ。(二一四頁参照)
- 又近畿地方全體では五區劃五分に當るから約四千九百五十萬貫でこれを全國の總額に比較すると五分の割合に當るのである。

三、活用

- 1 本圖は近畿地方綿絲產額の比較圖で特に大阪府に於ける綿絲產額の大なることを示したものであ

る。従つて本圖は教科書六十三頁の大阪市内の工場の圖及大阪にある紡績工場の内部の圖と相連關せしめて取扱はねばならぬ。

2 教科書の表圖は製産額を貫(量)にて示したものであるが、製造額を金高にて示し(二一四頁を参照し、時價に換算せよ)其の巨額に上ることを知らせるもよい。

3 猶委しくは二一四頁を参照して取り扱へ。

第四十九圖 京都にある絹織物工場と西陣織物工場の内部 (第六十四圖)

一、主眼

此の二工場の外見乃至内部を觀察させて、京都に於ける絹織物の盛況を知らしめる。

二、解説

1 上掲挿繪は京都市吉田町荒神橋東詰にある京都織物株式會社の一部分である。

圖は賀茂川の西岸から東面して、其の東岸に設立されたる同會社を寫したるものである。

2 會社の前面一帯は、賀茂川の積である。左方の橋は荒神橋で正面にある黒い大建物は事務所及び向裝部である。其の背後煙を吐ける煙突は紋織物部の動力、左方の煙突は染色部の動力部である。此

の煙突の手前の屋根は寄宿舎で、更に前面の白色の建物は倉庫である。又、最左方の白色の建物は食堂である。

本挿繪のバックに見えるは大文字山及び吉田山の連峯である。

3 此の會社は明治廿年五月の創立で同廿三年四月二十三日、前皇后陛下御親臨の下に開業の式が舉行された。其の資本金は二百五十萬圓。工場の本社現在敷地坪數は一萬七千六百八十九坪。建物は狀絲部、染色部、絡織部、汽織部、整理部、機械部、包裝部、選別部等に分れてゐる。職工數は一千三百五十人。

4 本社は創立以來、宮内省の御用達を拜し、皇室の御調度品を奉納してゐる。

明治三十三年以來、本社は、英照皇太后、昭憲皇太后、常宮、周宮内親王の行啓を辱ふしてゐる。尙ほ先年は、皇后陛下の行啓があつた。

5 主要な製品及び販路。

九重繻子

都繻子

シフォン

印度、南洋婦人服地

内地。

内地及支那。

フラン流行。

歐米、印度、支那、内地。

年産額約一百五十萬圓。

6 下圖は京都市西陣に於ける一織物工場の内部の一部分である。工場は各々其の秘密とする所があつて開放しない。従つて、内部の精細なる説明は遠慮しなければならぬ。

7 場内に見えるのは機、絲繰機、枠等で、今女工は紋織や、其の他の織物や、管繰りをして居る。即ち、挿繪の最も手前の女工は横及縦絲を繰り、次の反對に座せる女工は管を巻き、左方機上の人（前方數十の婦人も）は機を織つてゐる。

8 此の圖に見えて居る機械は御召又は縹子を織るに用ひるもので、機の上部に轆轤があり、其れに本の紐が下り、紐の下は綜統（ハタ）が付いてゐる。轆轤が回轉すると綜統が上下して布を織る事が出来る。圖に見える機上の人は工場の建て方が低いため、床下に穴を作り、此の中に踏木を入れて織つてゐる。しかし之れが又好都合である。即ち、濕氣を適當に上に送り絹絲を乾燥させぬから切斷する事がない。

9 西陣織といふ織物は、大抵圖中の機械に依らずして、所謂紋織機（一名デヤガタード、メカニツク）を用ひる。此の機械は紋紙を使つて種々の模様を織り込むのである。頗る精巧なものが出来るので西陣地方の多數は此の機械を用ひてゐる。之れは佛人デカート氏の發明にかゝるものである。

10 西陣と西陣織。

京都市の西北一帯を西陣といふ。茲は我が國最大機業地の一つである。地名の起りは、昔應仁の亂、細川勝元の軍が東方室町殿に據つたのに對して、山名宗全の與黨が西方此の地に陣したるに因るのである。此亂後に於て職工多く茲に集り、豊臣氏時代以後全國機業の中心となり、今や西陣織の偉名は天下に轟いて居る。大正三年末の調査に依ると組合員八、六八三戸。織工、一三、八九一人。徒弟、一、三三七人。機數、一四、三七六臺である。生産額は大要次の通りである。

品目	數量	價格
絹織物	二、三三五、二七二	一一、五二二、五九二
絹綿交織	二、三三四、五六〇	六、一〇三、二八八
綿織物	九六四、九六二	一、七三九、九九六
毛織物	二五、一二四	九二、二五二
麻入織物	一、〇〇三	二、三三〇
其他織物	四三一	三、四四二
合計	五、七一一、三三四	一九、四五三、九〇〇

西陣織は現今、錦綾、錦襦、羽二重、緞子、綸子、天鷲、御召、繰子等である。

三、活用

- 1 解説(10)に於て述べた統計的事項——織工數、機數、生産額を附言して京都市内の絹織物の盛況を知らしめよ。
- 2 文明開化の恩澤に依つて精巧なる製作品を出すに至つた事を兒童に知らせよ。
- 此の時には、西陣織の標本乃至實物を用意して置き其の精巧に感驚させよ。
- 3 學校附近に機織工場があるならば參觀させて、京都西陣の盛況を想像させる事もよい。
- 4 更に進んで、時節柄機業の奨励をなし、生産増進の策を説述するも有益である。
- 5 西陣織の機は佛人に依つて作られた事を一言し、我が國民の研究的發明的態度に缺けたる事を知らしめ、兒童をして將來此の缺陷を補ふ可く努力せしむる様、其の素地を培へ。

四、參考資料

- 1 友禪染。
縮緬、モスリン等に艶麗優美な模様山水を染め出したるもので京都の特産である。之れは東山天皇の頃、畫工深江友禪が初めて作り出したものである。其後大いに進歩したが明治六七年頃西村總左衛門といふ人に依つて大改良が企てられた。即ち、畫家岸竹堂に託して鮮麗優雅なるものを作り、かくて一新時期を劃した。爾後益々進歩して單に衣服地に限らず屏風、衝立、額面、窓掛等に利用され、目今、海外に輸出するものも少くないのである。

其の産額六百三十五萬圓。

工場三十、職工九千。

2 刺繡。

刺繡も京都の特産である。

昔天平七年吉備眞備が歸朝の際、傳へたものであると言はれてゐる。明治の初年西村總左衛門が岸竹堂に下繪せしめて、妍麗の作品を出し、又、貿易業者油田清助が屏風を製して、海外に輸出し、今日に及んでは一品數千圓のものがある。

3 京都府下織物全産額は七千萬圓。京都市は其の大半を占めてゐる。

丹波丹後地方では農家の副業として、近年養蠶業が發達し、郡是、綾部兩製絲株式會社は年々八十萬斤の生絲を産してゐる。綾部町には原蠶種製造所がある。又、丹後半島一帯は絹織物(縮緬)が盛んで峯山は其の中心地である。

4 京都市重要物産々額。

織物	三〇、一六七、九五七圓	金屬器具	五、五六二、五二一圓
染物	一一、九〇一、六五九圓	陶磁器	一、六三五、一一四圓
金箔	一、五六七、三二〇圓	漆器	八四一、四五八圓

扇子

五六三、五三六圓

刺繻

三〇三、六一六圓

二三六

第五十圖 蜜柑畑 (第六十五頁)

一、主眼

有田川沿岸の蜜柑畑と蜜柑のより分け圖を觀察せしめ、當地方産業狀態の一般を察知せしむ。

二、解説

- 1 有田川は紀伊國にあつて、源を伊都郡高野山に發し、數多の溪流を合して、西流有田郡に入り、遂に有田港に注いでゐる。
- 2 此挿繪は有田郡保田村大字山田原、紀明神山(三三九米)の山麓有田河々口より約二十町の右岸(北岸)の蜜柑畑を描いたものである。右方の山は其の蜜柑畑で、流る、川は有田川である。勿論、川は奥から手前に流れ、寫眞は、川下から撮つたものである。蜜柑畑に横線の幾條にも見えるのは、石垣を以て階段を作つてあるのである。黒く見えるのは雲州蜜柑の木である。石垣乃至堤は土砂の流失を防ぎ、階段の平面毎に柑橘を栽培するためである。前面の橋は山田原橋で、橋下に見える二艘の船は、上流の蜜柑を河口箕島港に送つて、今や西風に帆をはらまらせて川を逆つてゐる。船には二人の船頭と、數百の蜜柑箱が積んである。十一月から十二月

頃までは毎日、數十隻の蜜柑船が帆に風をはらませて此の川を上下するさうである。川の上流に見える山は岩室山で城址がある。

3 此の邊の山は高さが五六百米で此の挿繪の山は百米内外である。而して、箕島町から東方約三里の間、有田川兩岸の地は山麓から五六合目まで、殆んど皆、蜜柑畑である。従つて、五六月頃には、白い花を開き、芳香谷に満ち、白雪宛らであるが、十一月頃成熟の期に至れば山腹は黄金の色と化し、年の豊かを語るやうである。二ヶ月間にして、殆んど全部採納され、或は地方に賣りに出され、或は貯藏されて翌年に及ぶのである。

4 有田川沿岸一帯は田野少なく、全住民は約半ヶ年間、此の柑橘栽培に従事し、之れを以て生業としてゐる。此の地方の蜜柑は頗る美味にして、萬人好み食つてゐる。河口北の湊(箕島町)からは、汽船、帆前船、和船に積み込まれて、東京、大阪、九州殆んど全國に供給される。

5 右上方樹形内は蜜柑のより分け作業の光景である。茲は、箕島港に於て、蜜柑買集商人が蜜柑をより分けて荷作り準備をしてゐる所である。向ふの方に見えるのは箱、選り分け方は、大極上・飛切・松竹・梅の五等位が普通であるが、これも所に依つて違つてゐる。多くは女子の仕事である。

6 一箱の個数は六十個から百個位で、上物一箱八十個入りが一圓内外で下等は五十個位。其の賣れ先きの主なる所は、東京、名古屋、横濱、岡山、高松、浦鹽、大連、上海方面である。浦鹽、桑港に送られるもの

を加へ和歌山全部の産額は、約百五十萬圓である。

7 有田川沿岸蜜柑栽培の由來は今から凡そ二百五十年前、有田郡系我莊中番(今の系我村中番)村の人、伊藤孫右衛門が肥後の八代から移殖したものである。今尙、其の子孫は此の附近にあつて蜜柑畑を所有し、其の時の古本を藏してゐるこか。又、村の人は其の徳を慕ひ、紀念碑を系我村に建つて、小公園を作り將來に功を語らしめてゐる。

三、活用

- 1 有田川沿岸の山腹七分以下は、殆んど蜜柑畑であるといふ事實、及び此の挿繪に表はれてゐる其の觀察からして、當地方産業中、蜜柑が如何に其の主要部たるかを推解させよ。
- 2 参考資料に載せてある産額表を利用して、全國に於ける産額地位を知らせ、尙、當地方産額高を具體的に了得させよ。
- 3 圖によつて明らかなやうに、蜜柑畑は南向で日當りのよい所である。而かも此の地方の氣候風土は蜜柑栽培に甚だよく適してゐる。此の産業と氣候風土及び日光との關係を知らせて、産業を奨むる上、或は生産物を多く收めんための方策を考慮せしめるがよい。つまり、農業的生産的知識を授けるのである。
- 4 解説に於ても述べたやうに、此の地方の蜜柑は全國は勿論外國まで渡るのであるから、各地の商店

に於て、見受ける事であり、又、兒童の嗜好に上つて、彼れ等は日々目撃してゐるから之れを利用して此の地方の生産状態をしのばせるも面白い。

5 蜜柑のより分けや、輸送荷造りを觀察させて、丁寧、綿密、正直、確實、迅速等の商業道徳を授けよ。又、地方によつては、林檎・桃・梨・馬鈴薯輸送荷造り、選別法等と對照させる事もよからう。

四、参考資料

- 1 「有田よいどこ蜜柑どこ茶」
嫁にやりたい聲ほしよ。
「沖の暗いのに白帆が見える
あれは紀の國みかん船。」

2 柑橘類作付段別。

普通蜜柑、雲州蜜柑、八つ代柑、金柑、夏橙、柑子、ネーブル、オレンジ其の他のもの合せて、
四、四〇一町八段。

收穫高 一四、一八八、二九四貫
總價格 一、五〇一、四四二貫

3 大正四年柑橘類産額。

雲州蜜柑 六、八七九、〇三四貫
八〇〇、七一五圓

普通蜜柑

二、七八八、二〇六貫

二七四、三六二圓

1130

ネーブルオレンジ 三二二、四六六貫 六六、〇七五圓

有田郡 三、五〇六、九八四貫 四四三、八〇二圓

海草郡 二、九四七、九二〇貫 四〇九、四八九圓

4 内地の蜜柑主産地方。

内地蜜柑年産額 三、七〇〇萬圓

5 参考の爲め、和歌山縣の生産價格を紹介しやう。

農産 一五、七一九、九八二圓

工産 三八、六〇一、二八九圓

林産 二、六九九、二二九圓

水産 二、七二一、三四六圓

總計 六六、一四三、一四五圓

畜産 八、五九一、四三六圓

鑛産 四九九、〇九二圓

工産物

綿織物 一七、七二三、六〇六圓

紡績綿絲 七、九九九、七七二圓

(綿ネル)

漆器

一二、二〇二、四一四圓

七八五、九三〇圓

(内國向、七四一、四三〇圓)

外國向、四四、五〇〇圓)

林産物

丸材 一、九一四、三〇八圓

挽材 檜、杉、樅、松、其他

二、七九八、八四七圓

木炭 一、一四二、四一五圓

醋酸石灰

一六二、二〇〇圓

樹皮 一三一、五六九圓

第五十一圖 眞珠の採取 (第六十六頁)

一、主眼

眞珠採取の實況描繪を觀察せしめ、奮闘的生産の精神を養培す。

一、解説

- 1 此の挿繪は、志摩半島の南方英虞灣に於ける眞珠貝採取の有様を描いたものである。
- 2 而して茲は、眞珠王の名ある御木本幸吉氏の眞珠養殖場である。御木本幸吉氏は人力を加へて、眞珠を造殖する方法を案出した。其の方法は、豫め眞珠貝の稚貝を養ひ、適當の大きさに達した時採集し、機械を使つて殻を損する事なく、其の口を開き、貝殻等を磨つて製した半圓形の珠核を殻中の最も多く

真珠の發生する部分に附着させて、再び二三年間海中に放養すると、真珠貝は其の面を包被して茲に真珠が出来るのである。若し完全な丸珠を得ようと思ふならば、銀を以て製した珠核を入れる。(珠母貝中に真珠の最も多く成生せられるのは肉柱の邊で、之れに次ぐは外套膜縁の部分、肝臓の上面並に鏤鉸に近い耳狀突起の邊である。故に核を挿入するにも此に入れるやう注意すべきである。)

3 真珠貝の採取は、多く蟹婦である。挿繪に見えてゐるのも皆女子である。蟹婦は、磯齧に髪を結び手拭で頭を包み、海中眼鏡を掛け、白木綿の襯衣と猿股とをつけ、(本圖は腰巻きのやうである。)腰に長い繩を結び其の先に桶を附して海中に入る。若し、深い海底に出る時は「チヨロ」といふ小船に乗つて出るのである。採集は凡て水中に沈み、手探りながら採る、一回海底に沈む時間は約五十秒位で嚴寒の候には、海上に浮游する事三十分以内である。海底から浮び上る毎に、ヒュー／＼と口笛しながら呼吸する。

4 左方、岩上に居る二婦人は今、海中から休憩する爲めに上つた所である。右方海中の怒濤と戦ひつゝある數名の婦人は真珠の採集に活動してゐる所、實に壯觀である。

5 真珠貝は瓣鰓類で昔、尾張國阿古屋浦から此の貝を産したので「あこやがひ」ともいふ。介殼は稍、四角形で右殼は左殼よりも小。殼頂は一方に偏り、足は小さく、足絲を有す、右殼の前縁にある孔から之れを出し、海底の岩石に附着する。殼の外面は、暗褐色であるが内面は真珠色で閃光を帯び、介殼の長さ

は二寸位ある。此の貝は我が國の特産で、肥前・志摩・伊勢等の西南暖海に産する。明治二十二年以來、志摩國志摩郡神明浦の田徳島に養殖場が設けられ、産額は年々増加してゐる。此の介は波靜かな淺海でしかも潮流の疏通宜しき、岩石多き清澄の所に住む。産卵期は六七月の頃。介殼は一年にして、一寸を超え、三年にして、一寸五六分。此の頃は成熟に近づいたものである。

三 活用

1 真珠貝採集の實況を十分に觀察させる。

(イ) 英虞灣内
(ハ) 蟹婦。
(ホ) 桶。

(ロ) 岩石
(ニ) 怒濤と戦ひつゝ採集せる蟹婦。

2 真珠の生産すべき海状を推解させる。但し、解説5に於て述べた事は教師の補説が必要である。

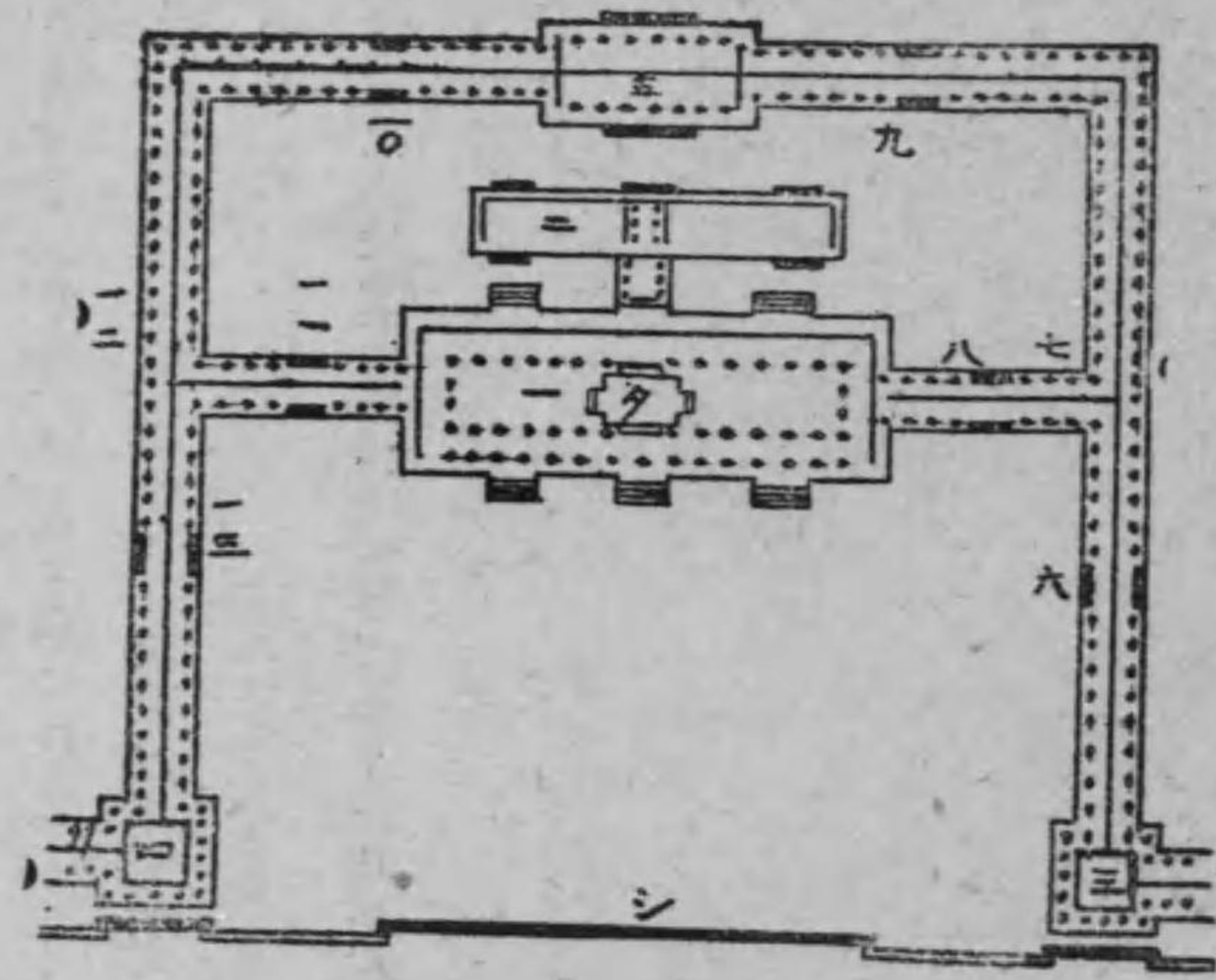
3 壯觀なる真珠採集の實況からして、奮闘的、進取的生産を致すの精神を練成する。

特に海國の我が男兒にとつて、斯かる職業を觀察授知せしめるといふ事は大切である。又、御木本氏の熱心なる真珠増殖改良考案に關しては、一言を加へ、兒童をして生産に對する熱心と努力の習慣とを養はしめるがよい。

四、參考資料

- 1 眞珠にも種々あるが「あこや貝」中に産するものが最上で「くろてふ貝」に産するものが之れに次ぐ。黒蝶貝は琉球・臺灣・南洋に産し、殻の外は灰褐色で内面は眞珠色である。此の殻中には黒眞珠を産する。
- 2 淡水産の「からすがひ」科の種類中に成産するものも往々逸品を出す。時には珍奇美麗の品を出す事もある。
- 3 「あはび」の中に産するものは聲價共に前者に及ばぬ。
- 4 「まへがひ」中に産出するものは、其の形が大きいので貴重せられてゐる。
- 5 その他、「まへがひ」、「あさり」、「はまぐり」、「はいがひ」、「かき」の眞珠は光澤劣悪にして貴重せられぬ。
- 6 眞珠を保存するには、常に絹布、脱脂綿等にて包被し、時々、酸性なき植物性の精製油中に浸し、氣中の酸北を防ぐのである。
- 7 世界の主産地は、日本、ペルシヤ灣、紅海、シーロン島、アルー諸島、スール諸島、西オーストラリヤ、バプア、木曜島、カリフォルニヤ、メキシコ西岸、西印度諸島。
- 8 眞珠の成因。

大極殿之平面圖 (平安神宮)



き事を知らせる。

- 一 高御座壇
- 二 大極殿
- 三 小安殿
- 四 蒼龍樓
- 五 自虎樓
- 六 照訓門
- 七 宣光門
- 八 東福門
- 九 嘉喜門
- 一〇 永福門
- 一一 西華門
- 一二 壽成門
- 一三 光範門
- 一四 朱欄

通常唱ふる所は、貝の體內に砂粒の如き外物が浸入すると、貝は眞珠質を分泌して之れを包被する、是れが眞珠といふものである。而して、眞珠の中心となるべきものを核と稱する。核となるものには砂粒の他、植物性魂片、寄生蟲、卵子などがある。

9 眞珠は諸種の裝飾、諸種の細工物に用ひる。

第五十二圖 平安神宮

(第六十七頁)

一、主 眼

平安神宮の全景を觀察せしめ、往昔を偲ばしめ、且、敬神の念を起さしむ。尙ほ、京都には之れに類する壯麗なる神社佛閣及び、有名なる名所舊蹟の多

二、解説

1 此の挿繪は平安神宮の正面圖である。之れは昔の大極殿(其の址は今の朱雀村聚樂廻の瓢箪池といふ所にある)を縮少せしめたもので其の構造には少しも變がない。

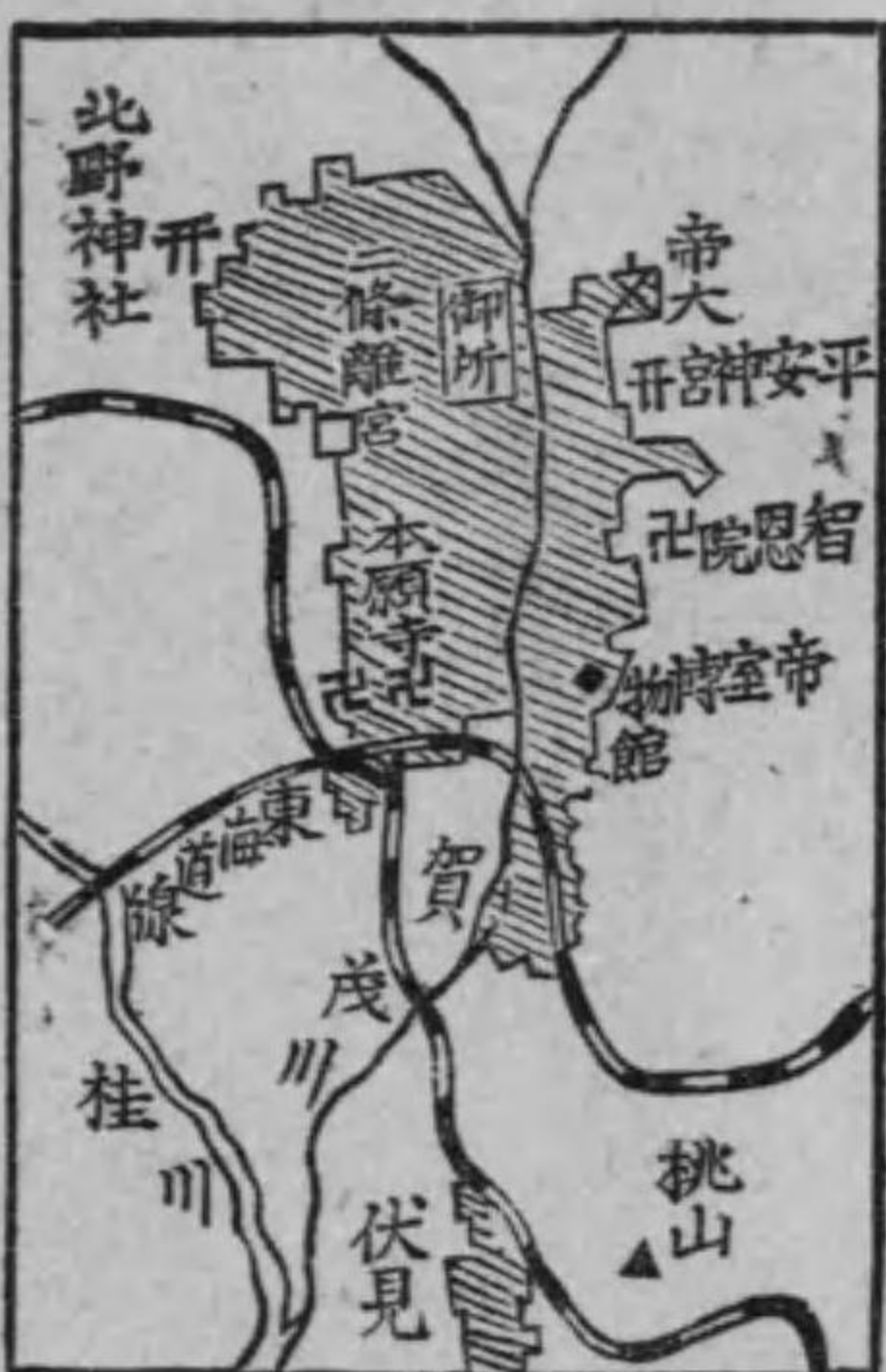
2 本神宮は、京都府山城國京都市上京區岡崎町にある。

3 平安神宮の背後には、吉田黒谷聖護院の森林が鬱として繁り、前には疎水運河を擁し、遠くには、比叡、愛宕、近くには東山の翠光を望んでゐる。又、四圍には、博覽會場、圖書館、動物園、商品陳列所、武德殿等がある。

4 境内の面積は一萬六百五十坪で、建物本殿、視訶屋、透塀、社務所、應天門、龍尾壇、紀念殿(大極殿)、廊下等である。

5 本社は、明治二十七年に起工し、二十八年二月に竣工した。祭神は桓武天皇であつて、宮幣大社に列し、平安神宮の神號を賜つてゐる。

京都都市の街圖



祭日官祭は四月十五日。私祭は武德、時代の二祭である。

6 時代祭。

平安神宮の私祭で、毎年十月二十二日に行はれる。當日午前八時、神前で神幸の行列を整へ、前列は雜色、伽陵頻伽、蝴蝶、樂人次に、御賢木、神饌、唐櫃、神職(狩衣騎馬)、楯矛、弓矢、御劍、禰宜(衣冠騎馬)隨身(一人)、神職(齋服騎馬二人)紫翳、次に風輦、次に菅翳、雨皮唐櫃、神馬、宮司(衣冠騎馬)主典(同上)雜色等とし、應天門前通を西へ、冷泉橋を渡り、疏水西岸を南へ、二條通りを西へ、河原町を南へ、京議事堂に風輦入御ある。この行列は、平安遷都以來、文物制度の變更した時代を區別し、其の當時の行装を模出したもので、古雅瑰麗な衣冠、甲冑を初め、燦爛たる旗幟、立物、嚴麗な社拜など頗る眼を奪ふのである。行列の前驅は、英式銃を擔ひ、陣太鼓を叩き、笛を吹き、大太鼓を前に抱へて打鳴らし、拍子おもしろく進み行く山國隊である。次は弓矢組。次は徳川時代の城使上洛式。次は織田信長上洛式。次は、城南の流鏑馬式。次は延暦武官出陣式。次は延暦文官參朝式。次は前記の神幸。午前九時には議事堂を發して、寺町通を北へ二條通を西へ、烏丸通を南へ、四條通りを東へ、寺町通を南へ、休憩所に着く。午後一時茲を發し、寺町通を北へ、四條通を東へ、繩手通を北へ、三條通りを東へ、應天門通りを北へ、慶流橋を渡り、神宮に還御するのである。

7 武德祭。

毎年五月全国の武術家を會合させて祭事を行ひ、神靈を奉慰し、式後、武徳殿に於て、古來の武技を演ずるのである。是れは桓武天皇が武を練り、兵を養ひ、南都文弱の弊を矯め、以て、東北を平定し給ひ、常に武技を叙覽嘉賞あらせられたに基つたのである。

三、活用

- 1 壯麗神肅なる社宇を觀察させ、古代の建物及び風物を推想させ、且つは、敬神虔神の念を養ふやうにさせたい。
- 2 京都には此の外、名所、舊蹟、古往の神社、佛閣等數知れぬ程であるから、此の挿繪以前の神社、佛閣、名所、舊蹟の掛圖、繪葉書を用意して置き、之れが利用活用をなさなければならぬ。
- 3 此の挿繪は、奥行ある神宮建築の描寫であるにもかゝらず、一見平面的のやうに見える。特に夫の龍尾壇(蒼龍樓、白虎樓)は前方に出てゐるのであるから、此の觀察も誤つてはならぬ。矢張り如斯練習的觀察から他の如斯、挿繪、掛圖、繪葉書等の正確なる觀察をなさしめる事に兒童をして心を留めしめるがよい。尙本挿繪を明確に了得させるため、大極殿の平面圖を示せ。

四、參考資料

1 京都御所。

上京區丸太町の北にあつて、東は寺町から西は烏丸通に至る、其の四周は、石垣で圍み、南北十一町

餘、東西は、八町餘ある。御所、紫宸殿は正中に位し、溝涼殿は西に、宣陽殿は南に、常御殿は東にある。南の正門を建禮門といふ。東南には仙洞御所、其の西北には大宮御所、又、東北には祐の井がある。(之れは、舊中山家の邸地であつて、明治天皇御産湯の井である。)尙、白雲神社、宗像神社、主殿寮出張所等は、御苑内に散在してゐる。御苑内には清冷の泉水潺湲として流れ、松、梅、櫻等の樹木が多い。實に崇高清淨の地である。

2 伏見桃山御陵と東御陵。

伏見町の東南にあつて、舊桃山城址(文祿年間豊太閤が茲に城を築いたが關ヶ原の敗戦後破毀されて、荒廢そのまゝであつた。)である。大正元年八月、明治天皇の御陵を舊本丸跡に、大正三年四月、故皇太皇陛下の御陵を名古屋丸跡に定めさせられた。茲は、松栢蒼鬱としたる森林の開拓せられた所で、今は、崇高極まりなく、明治大帝の洪大無邊なる御神徳を仰がんとため參拜する者絡繹として常に絶えぬ。

3 二條離宮。

堀川二條の西にあたる。慶長七年徳川家康が始めて茲に築き、代々徳川の威武を示した所である。明治元年、天皇の御臨幸があり、更に十七年开始めて、離宮と定められた。外廓は二十餘町で、其の周圍には深塹を繞らしてゐる。又城内の宮殿や林泉の結構は莊嚴を極め、近年東宮御所と定められた。

4 北野神社。

京都市の西北隅にある。村上天皇の天曆元年菅原道真公を茲に奉祀したのであるが、爾來、九百年間屢々兵火に罹つて、十數次も改造した。今の社殿は、慶長十二年秀頼が改造したもので爾後、五十年毎に之れを修繕する事となつてゐる。社格は、官幣中社である。

5 知恩院。

四條通、東山麓、圓山公園の北に隣接してゐる。華頂山大谷寺と稱して、東山第一の巨刹。淨土宗本山圓光大師開發の靈場である。本堂には、大師自作の木像を安置してある。大谷寺の額は後奈良天皇の宸筆である。本堂東南屋根裏の傘、鶯張りの廊下、大梵鐘（高さ一丈九尺、直徑九尺餘）は共に名高い。

6 本願寺。

東本願寺は、烏丸、七條の北にある。眞宗大谷派本山であつて、慶長七年教如上人の創立である。天明八年文政六年、安政五年、元治甲子四回火災にかゝつて焼失した。明治二十八年、新築が竣工した。山門と勅使門と阿彌陀堂門とは、同四十三年の建立である。何れも建築は雄大、莊嚴で、御影堂には見眞大師自作の木像が安置してある。枳殻邸は本寺の三丁東にある。滴翠園は十三景として名高く、風趣恍惚として仙境の思ひがする。

西本願寺は、堀川通、七條の北にある。眞宗本派の本山で文永三年親鸞上人息女覺信尼上人の廟所を東

山に造り、天正十九年、現地に移したのである。本尊阿彌陀佛は春日の作で、御影堂には、上人の骨骸が安置してある。境内には、水吹き、銀杏樹がある。又、東南隅には、飛雲閣がある。（豊臣公が聚樂邸を移した所で園を滴翠園といふ。）

7 此の外、神社、佛閣、名所、舊蹟には

興正寺	本國寺	島原廓	東寺
伏見稻荷神社	東福寺	通天橋	泉涌寺
三十三間堂	帝室博物館	智積院	豊國廟
妙法院	豊國神社	大佛方廣寺	耳塚
西大谷	清水寺	八坂塔	高臺寺
圓山公園	東大谷	長樂寺	靈山
青蓮院	植髮堂	南禪寺	疏水
若王寺神社	永觀堂	眞如堂	黒谷
安樂寺	銀閣寺	百萬遍	大徳寺
帝國大學	吉田神社	八阪神社	武徳殿
紀念動物園	下鴨神社	相國寺	鞍馬寺

上加茂神社	建勳神社	平野神社	金閣寺
等持院	妙心寺	仁和寺	高野
太秦廣隆寺	天龍寺	清涼寺	大覺寺
法輪寺	粟生光明寺	愛宕山	嵐山
長岡天滿宮	楊谷寺	天王山	笠置山
男山八幡宮	三條大橋	四條大橋	草堂
五條大橋	建仁寺	新京極	本能寺
六角堂			

8 京都からの通信。

春は嵐山の櫻、秋は高雄山の紅葉など、四季折々の眺め絶えぬ西の都に安着し、訪れ参りし處多けれど、今は唯々神社佛閣のみを略報致す可く候。比叡山の山積きは、「蒲團きて寝たる姿や東山。」となり、當市の東に起伏致し居り候。其の麓即ち、賀茂川の東部には泉涌寺、豊國神社、清水寺、八阪神社、祇園社、智恩院、平安神宮、銀閣寺など有之候。西北の郊外にも金閣寺等の社寺少なからず候。そも金閣寺は驕奢を極めし、足利義滿の建築せしもの、今尙壁などに、黄金の痕跡ありて、室町幕府

の全盛時代を偲ばしめ候。庭園は池形山容いとめでたき上に、奇岩翠松の配置佳麗いはん方なし。賀茂川以西の市内には、本能寺東西本願寺など有之候。其の兩本願寺は、宏壯雄大にして、善男善女が隨喜の涙に咽ぶも理なりと相感じ候。殊に東本願寺の大噴水を見上げんか首筋いたき許りに御座候。

第五十三圖 宇治の茶摘 (第六十八頁)

一、主眼

挿繪の觀察によりて、宇治に於ける茶園及び茶摘の實況を知らしめる。尙、國有、名産の茶に對する觀察を確立し、國産の獎勵の念を授ける。

二、解説

1 此の挿繪は宇治町附近の茶摘の態を示したものである。茶の木は瑞緑滴るが如くに全畑全山に繁茂してゐる。是れは四五月頃の景である。手前は平地の茶畑で整然と茶の木が植ゑられてある。其の間で茶を摘んでゐるは茶摘女で二十歳前後。茶摘季節には奈良、滋賀の地方から澤山に集り來るとか。背に負ひ或は地上に置ける籠は摘みたる茶を入れるものである。圖の中程に杭を立て簀を蔽ふて屋根をふけるは玉露といふ最上茶を製するための装置である。即ち玉露は此の下に於て發育するもので日光を強く受けぬから柔かい上品質のものが出来る。前方に見える

山は、比叡山脈から南に延び京都府と滋賀縣との堺をなす山脈である。此の山腹山麓も今は開墾されて一帯に茶樹が栽培されてゐる。

2 宇治町は久世郡の東南部で宇治川の左岸にある。茲は奈良街道の要路で宇治橋附近は、古來屢々戰場となつた所である。有名な平等院は其の東南にある。

茶畑は紀伊、宇治、久世、綴喜、相樂等の各郡にあるけれども宇治町が其の中心であるから、宇治茶の名を擅にしたのである。

是等の茶を摘む婦人は約二千人に及ぶ。

3 宇治は玉露で勝れ、綴喜郡は煎茶で秀で、久世郡は碾茶を以て頭角を抜いてゐる。斯業の機關としては宇治町に京都府茶業組合聯合會議所があつて府下十五ヶ茶業組合を率ゐ、大いに斯業の發展に力めてゐる。

郡名	碾茶	玉露	煎茶	紅茶	番茶	計
紀伊	四〇一	九八四	三六五九	五〇五	三五二六	一七、九三二
宇治	三八七六	一五六四五	一九、一三二		二、四八〇	四三、一三三
久世	三、五五九	一六、一五〇	二四、七五八		一七、四八〇	六一、九五二
綴喜	一五〇	八、五三三	七三、五二七		三八、二八三	二〇、四八三
相樂		二、六六六	五五、一一一		二〇、三四六	七五、七二三

茶名	價格	茶名	價格
玉露	三十五萬圓	碾茶	十五萬圓
煎茶	六十七萬七千圓	番茶	七萬五千圓
合計	一百二十六萬圓		

4 宇治茶の起原は遠く建久年中山城國梅尾の明惠上人が其の師榮西の宋より歸朝の際携へ來りし茶種の分與を受け、之れを宇治郷に栽培せしに權輿す。後、元年中足利義滿其臣大内義弘に命じて再び茶を宇治に植ゑしめ、醍醐、梅尾と共に茶園佳地と定めたり。次いで豊臣秀吉も又茶事を好み、諸侯亦競ふて是れを嗜むもの多く、宇治の茶業盛大を致し、其製法を精巧にし、且、香味を溫和ならしめんが爲め茶園に覆をなすに至りたり。此の覆をなすことは、特に宇治郷の特權にして、他は之れを嚴に禁じたり。然れども、小倉、木幡等の茶業者のみは下茶師として、宇治郷に天災洪水等ありし時の豫備と稱して、覆下園を培養せしむ。當時碾茶製は宇治の専有ともいふべき狀況なれば、茶業者は頗る巨利を博したりといふ。此の頃より碾茶と煎茶との製法全く分れたり。後、徳川氏の時代に及び。宇治を以て特に茶所と定められ、大いに海内に重きを置くに至れり。當時宇治に上林といふ者あり、同地の豪族として、徳川氏の旗下に列せられ、宇治茶業家の頭取りとなり、次いで代官を兼ね。又同地に、京師

の御用のために設けられたる御物茶師十一名及び御袋茶師九名あり。此九名は大阪の役に三袋を獻じて勝ち軍をした、嘉例を以て、毎年半袋二個を納めり。寛永九年家光、宇治の上林に命じて、毎年特に最良の茶を製せしめ茶壺三個を納めしめ其の一個を朝廷に獻せり。その他、輪王寺宮、西丸、三家、三卿よりも三十餘壺を宇治に徴せらる。初昔ハツムカシ、後昔ノチムカシの濃茶は非賣品にして一壺を求むる時は必ずそれに黄金一枚を酬いたり。濃茶の銘に初昔と昔の字を附するは茶をつむに宇治にては八十八夜を真中とし前後十日を合せて二十一日間にとるを例とするが故に二十一日を合書して昔字となるに起れりと云ふ。茶銘は家々によりて異なれども、初昔、後昔の名は必ず上茶の稱とす。(百科辭典)

三、活用

- 1 此の挿繪は産業を以て名を得たる宇治の名所を知らしめるために挿入されたものである。故に此の圖を取り扱ふには、
 - (イ) 産業を知らせる。
 - (ロ) 名所——都邑としての宇治。の二大眼目を以て活用すべきである。
- 2 觀察せしむべき要點。
 - (イ) 廣大なる茶畑。

(ロ) 茶の木と整然たる植ゑ方。

(ハ) 茶摘女。

(ニ) 玉露の栽培法——其の装置。

而して其の産業(茶)状態を推察させる。

3 解説に述べた如く歴史的に茶の生産發達をなしてゐるのであるから、宇治茶の天下に聲名並びなき理を兒童に知らせ、且つは、歴史戰跡の地としての教授をなし、一名所たる宇治の價値を損せざるやう力めなければならぬ。

4 宇治を中心として産する茶の總格は全國三位であるが品質に於ては天下一品である。先に教科書第四十四頁には「清水港に於ける茶の積出し」として其の輸出狀況が描いてあつた。而して茲には茶畑が挿入してある。此の同じ茶に於ける挿繪の異なる對照は意味ある事である。静岡縣は産出額が多くて、しかも外國向きで質が佳絶でない。宇治附近は産出額も劣らぬがそれよりも寧ろ品質が佳良で内國人に趣向されるといふ點に於て秀れてゐるのである。つまり、前者は産業に主力を置いて取扱ひ、後者は名所宇治の源泉たる意味に於て取扱ふ可きであると思はれる。

四、參考資料

- 1 玉露製茶の起原。

天保六年の頃、江戸の茶商山本嘉兵衛、山城國久世郡小倉村木下吉左衛門の家に宿し、日夕、碾茶製造場に到り見るに場内の温熱甚だしきにも不拘、職工の碾茶を燥かすに「さらへ」を取りて、悠々と蒸葉を攪和するあり。嘉兵衛性急にして、是れを以て職工の怠惰となし、躬ら手を以て急に攪和す。然るに其の蒸葉は粘液甚しく掌中に附着すること宛も飴の如し。故に乾燥するに従ひ、盡く小團形となり。吉左衛門見て大いに驚き、心に其の誤認たを知れど毫も之れを顔色に表はさず。尙、職工を勵まして數片を製せしめ、江戸に齎し歸り、是れを新製「玉の露」と名づけて華主に送りしに大いに賞賛を博せり。當時の風潮太平奢侈に流れて、「玉の露」を喫せざれば世人に齒せられざる様なりき。是れ玉露製茶の濫觴也。

又一説に大阪の竹工某時々宇治に至り、碾茶の製造法を見しが一日茶葉を携へ來りて、是れを碾茶に製せん事を木幡村の一瀬某に依頼せり。因つて之れを製するに、肥料を十分に施したる肥潤の茶葉なるが爲め、揉むに従ひ悉く掌中に附着して團となりたれど、是れを煎するに、其の美味にして口中甘露の如きを覺ゆ。故に之れを玉露と名づく。

2 玉露製煎茶製法。

此の製法は、覆下園より摘採せる茶葉を以てし、蒸葉法及び放冷法等碾茶と同一になす。焙爐上に鐵網及鐵條を架し、助炭と稱する框面に厚紙を貼りたるものを其上に載せ、茶葉八百匁目を入れ、手にて

之れを搓揉しつゝ乾燥する也。然れども覆下園の茶葉は、肥料多きが爲め、葉汁甚だしく、粘着氣ありて、掌中に附着し、巧手にあらざれば、細條となし難し。而して稍々燥けるものを上等職工の焙爐に移して、十分に是れを完成せしむ。乾燥せしものを蔓切と稱へ、篩を以て是れを分ち、數爐の茶を集めて、煉爐に移し、文火を以て再び焙る。後、篩、篩等にて揀撰する事屢次にして、後是れを精製するもの也。(大日本百科大辭典)

3 玉露製茶の主産地

京都	三四八、一三九圓	三重	一八、五一四圓
奈良	一〇、二九一圓	愛知	九、七〇八圓
滋賀	八、六一〇圓	富山	八、五三三圓
全 國	四四二、五〇八圓		

第五十四圖 大阪港の棧橋 (第六十九頁)

一、主 眼

大阪港の棧橋の壯大なる様を觀察させ大阪市發展の故なきにあらざること知らしめる。

二、解説

二五〇

1 圖は大阪港の棧橋を其の北側の廣場から撮つたものである。手前の廣場は波止場の倉庫前で人夫が荷物を運搬する處である。前面左手から長く突出してゐるものは即ち築港棧橋で、其の右手先端の建物はバラック式の建物で荷物を船より積上げるのである。

棧橋の上には築港電車が通じてゐて、今汽船からの乗客を載せて三臺市街の方へ走つて行くのが見える。(然し現今は電車は棧橋の袂までしか來ぬ)この電車は先端の荷物積場の建物内に通じてゐる。

圖中棧橋の向側に大なる汽船が二隻繫留してゐるが煙突の記から察すると大阪商船會社の船である。其の左側の汽船の方には大勢の人が居るがこれは汽船の荷物を積出しする人夫である。一隻の汽船が着くと其の荷物を積出すために數百人の人夫を要するといふことである。

2 大阪築港について其の設計の概要を記せば、新港は安治川口天保山沖に位し、全く人工を加へて築造したる商港である。即ち南北二條の突堤によつて外港より擁護したる水面を得船舶の碇泊に安全ならしめてゐる。港内を分ちて内港外港とする。外港は港口に近く位し、これに接して一條の鐵棧橋を架け、荷役の急を要する者及飛脚船の繫留に備へてゐる。内港は棧橋の東方に位する港内の水面で、陸に接して斜出せる廣大なる突堤數多を築き、船舶を横附とし荷役をなさしめる計劃である。又海岸に沿ふて廣大なる埋築地を作り倉庫鐵道線路其他荷役に要する設備並に市街地に當つるを以て目的とする

港口は南北兩突堤終端の間にあつて西微南に向ひ下底に於て幅員一百間、水深二十八尺を有し、鐵製燈臺があつて其の位置を知らしめてゐる。

北突堤は安治川口右岸埋築地の終端即ち安治川口南落標附近より起り、西に向つて走り、其の終端に近く南方に屈曲し、南突堤の終端と相對す、總延長一千五百二十間、重量大なる捨石を以て基礎を作り、上部はコンクリート塊を以て包護し、波濤の襲撃に堪へしめてゐる。

南突堤は内港防波堤と相連りて其の終端より起り、三箇の曲線及二個の直線より成つて居る。其總延長二千四百三十九間、其の構造は北突堤と異なる。

棧橋は鐵製で天保山沖埋港地より港口に向ひ、外港に接して架設せられ、其の幅員接岸部長さ一百八十呎と六十呎其の他は九十呎を有し、全長一千五百呎に達して居る。其の上部兩側に於て貨車用鐵道二線及起重機用一線を有す。けれども接岸狹隘部にあつては兩側に貨車一線を有し以て船舶の繫留及荷役の用に供して居る。

三、活用

1 大阪の生命は實に其河海船舶碇泊の要衝たるにあるのである。斯くて市民は政府の補助を乞ひ、總金額二千二百四十九萬四百圓といふ巨費を投じ、斯かる宏大なる築港工事を斷行したことは注意する必要がある。

- 2 本圖を説明するには平面圖を用意して其の位置及規模を知らしめるがよい。
- 3 大阪築港の宏大なることを知らしめる趣味的説話としては次のやうなことを附説するもよい。
「築港工事に使用した捨石は其量頗る多額なもので其の大部分は大阪を距る西方約六十五哩に位する岡山縣邑久郡朝日村犬島に附採し、海路これを運搬沈下したもので、これがため周圍三里餘の犬島は全く其の原型を失つてゐる。」
- 4 規模宏大なる築港を見るに至りてよりは船舶の出入も益々頻繁となり、其航路も亦益々延長して北米、南米、印度、南洋等へも通ずるに至り、世界的の商港となつた。而して外國貿易は二億圓を超え、本邦第三の貿易港となつたことを附説するがよい。
今左に貿易額の變遷について見ると、

		大阪港貿易額 (單位百萬圓)				
		大正元年	大正二年	大正三年	大正四年	大正五年
輸出	五七	七三	七四	九四	一四二	
輸入	二七	四二	四一	五一	八二	
合計	八四	一一五	一一五	一四五	二二四	

本港に於ける重なる貿易品及價格一覽 (單位千圓)

輸出品	大正五年	輸入品	大正五年
綿織物	三四、八三〇	金屬類	二八、六七〇
綿絲	二五、四四〇	眞鍮青銅	一三、九九〇
銅	九、二三〇	銑鐵	四、八〇〇
メリヤス	五、五四〇	鐵材	二、七六〇
マツチ	三、三〇〇	練綿	二五、三五〇
アンチモニー	二、九五〇	野蠶絲	一、七六〇
硝子製品	二、九三〇	モルヒネ	一、三六〇
鐵製品	二、六六〇	麻類	一、一八〇
眞鍮黃銅	二、五五〇	曹達灰	九一〇

四、參考資料

1 内港は港内深く棧橋の東方に在る防波堤により外海より擁護せられた水面で、水深二十八尺を有し四十萬七千坪の面積を存せしむるの計畫であるも、目下竣成せるものは其幾部分に過ぎない。内港に於て埋築地に接し漸次に長さ二百四十間幅八十間乃至一百間の突堤數多を築き、棧橋を合して延長凡そ四千間に達せしめ、其の周圍を二十八尺に浚渫し、突堤には上屋、道路及鐵道を設けてゐる。

2 外港は南北突堤の間に於て港口に近い水面に船舶の一時碇泊に供へるもので、其の面積は一百七萬三千坪、水深二十八尺を有する。

第五十五圖 大阪市街の一部 (第六十九頁)

一、主眼

本圖を觀察せしめて大阪市街の般盛なる様を知らしめる。

二、解説

1 本圖は大阪市街四ツ橋の電車停留所の繁華なる所を撮つた繪である。四ツ橋は東區西區の境をなせる即ち、西横堀川と長堀川と直角に交り、西横堀川に上繫橋、下繫橋、長堀川に炭野橋、吉野屋橋を架する風趣の所である。詩人はこれを井字橋とも稱する。

電車の交叉點は此處にあつて、大阪市街の略中央に位し、往來頻繁で最も般盛な所である。

2 圖中左方の建物は市營電車の變壓所で又右に見える建物は市營電車の事務所である。又中央の電車は梅田行電車で向ふから來るは惠比須町方面に行くものである。又左から來るは玉造行の電車、右から來るは安治川築港行の電車である。

三、活用

1 本圖は大阪市街の繁華なることを知らしめるのが目的である。電線の網の目の如く張られたる處及電車の縦横に通ずる處より想像せしめて其の般盛なることを知らしめるがよい。

電車の如きもこの地では一時間に三百臺の多きを見ることが出来る。以て如何に電車の往復絡繹たるかを知ることが出来る。

2 市内般盛な場所としては道頓堀、千日前、新京極等がある。道頓堀には許多の演劇場があり、技を凝らし觀客を引き。千日前には雜雜の見せ物寄席等ありて喧囂を極め。京都の新京極或は東京の淺草に比することが出来る。これ等の各地の繪畫寫眞を提出して補説するがよい。

三、參考資料

1 道頓堀。大阪市中最も熱鬧の地で南區道頓堀川の南戎橋と日本橋との間十町餘をいふ此の地には五座の劇場軒を接し茶店料理店等櫛比して極めて雜沓す。昔慶長年間安井道頓梅津川なる小渠を改修したるより今の名あると。貞享年間竹本義太夫、近松門左衛門と協力して淨瑠璃を興し、之を操人形芝居に上せたるどころとして知られて居る。

2 千日前は大阪城南區道頓堀の南にある、東京の淺草や京都の新京極の如く當市の遊覽場であつて見世物諸興行晝夜喧々絶ゆることがない。この地はもと當市の刑場であつて五十年前までは墓石累々としてゐた。

- 3 天王寺は大阪城池から連絡した丘陵地であつて、天王寺を始めとして歴史上の遺蹟に富んでゐる。境内は市民の遊觀場として、今は公園となつてゐる。
- 4 梅田停車場は昔の曾根崎の地で寛永中に新開されたのである。今は繁華とみに加つてゐる。

第五十六圖 神戸港 (第七十、七十一頁)

一、主眼

本圖を觀察せしめ横濱と並び稱せらるる神戸港の殷盛なる様と船舶の出入の盛なることを知らしめる。

二、解説

- 1 本圖は神戸市街の北にある諏訪山公園から南に向つて右は川崎造船所、左は突堤との間を瞰下した圖である。(猶其の大體は次頁に掲げた圖を参照するがよい。)諏訪山は神戸第一の公園で市街港灣より遠く紀泉の山影淡路島の翠螺を望む眺望のよい地である。
 - 2 圖中右方に海中深く突出し、釣橋の如く見ゆるは川崎造船所の「ガントリークレーン」で、船艦建造の用に供するものである。尙其の手に煙突の林立せる大工場は川崎造船所である。
- 川崎造船所は神戸市東川崎町二丁目にある株式會社で、明治三年の創設である。明治二十九年十月株

神戸港の圖



- イ、税關
- ロ、水警
- ハ、棧橋
- ニ、商品取引所
- ホ、港務局
- ヘ、小野濱
- ト、川崎造船所
- チ、三宮驛
- リ、高女
- ヌ、諏訪山

分工場、大連出張所、上海工場(設置中) 廣島製氷部及東京出張所を有して居る。 帝國海軍、清國及シヤム國の注文により 軍艦、驅逐艦、潛航艇、水雷艇等を造つた 最初の造船所である。

圖中橋の如く見える「ガントリークレーン」は船舶建造臺を蔽ひて建てられた高大なる鋼材の骨組上に起重機を走らせて造船材料を運搬する装置である。現今一

- 3 萬噸以上の艦船を建造し猶盛に外國の砲艦の如きものまで建造するに至つたのである。
 - 3 圖に見える海面は米利堅波止場の沖で最も船舶の出入の多い所である。
- 七十頁の圖中海岸の中央に一字形をなせる防波堤の直手前は棧橋である。其の直ぐ左の稍高き建物は税關である。水上警察署は棧橋の直ぐ右手にある。

4 七十頁と七十一頁との織目の手前に見える二階建の建物は縣立高等女學校である。三宮停車場は其少し左前に當る。

5 圖の左方四個相並んで海中に突出してゐるのは築造中の繫船岸である。各繫船岸には上屋があつて貨物の倉庫となつてゐる。尙各繫船岸には軌道が來て貨物は直に汽車(海陸線)によつて東海線に連絡する様になつて居る。

築港工事は明治三十九年より十一ヶ年に互り工費一千七百萬圓の豫算で着々進行中である。繫船岸の左方長き直線上のものは防波堤である。

第四繫船岸と第三繫船岸(畫に向つて左より數へる)の中央後方にある稍大なる建物は税關である。

三、活 用

1 挿繪を中心として、神戸港の其の位置夙に近畿地方の門戸たること且つ市民の覺醒により近時著しく港灣の設備を完成し(湊川は數年前迄は市の中央を南北に貫流したれども遂に河心を市の西郊に變じ和田岬には白色不動の燈臺、東波止場には不動綠色の燈竿を設け、出入の船舶を導き、港岸には棧橋、倉庫、造船所、暴風雨警報等を備へ乃至巨資を投じて第一より第四に至る繫船岸を築造し)横濱港と東西相對して其の雄を競ふてゐることを知らしめねばならぬ。猶神戸港發達の狀況としては次の如き統を計示して知らしめるがよい。

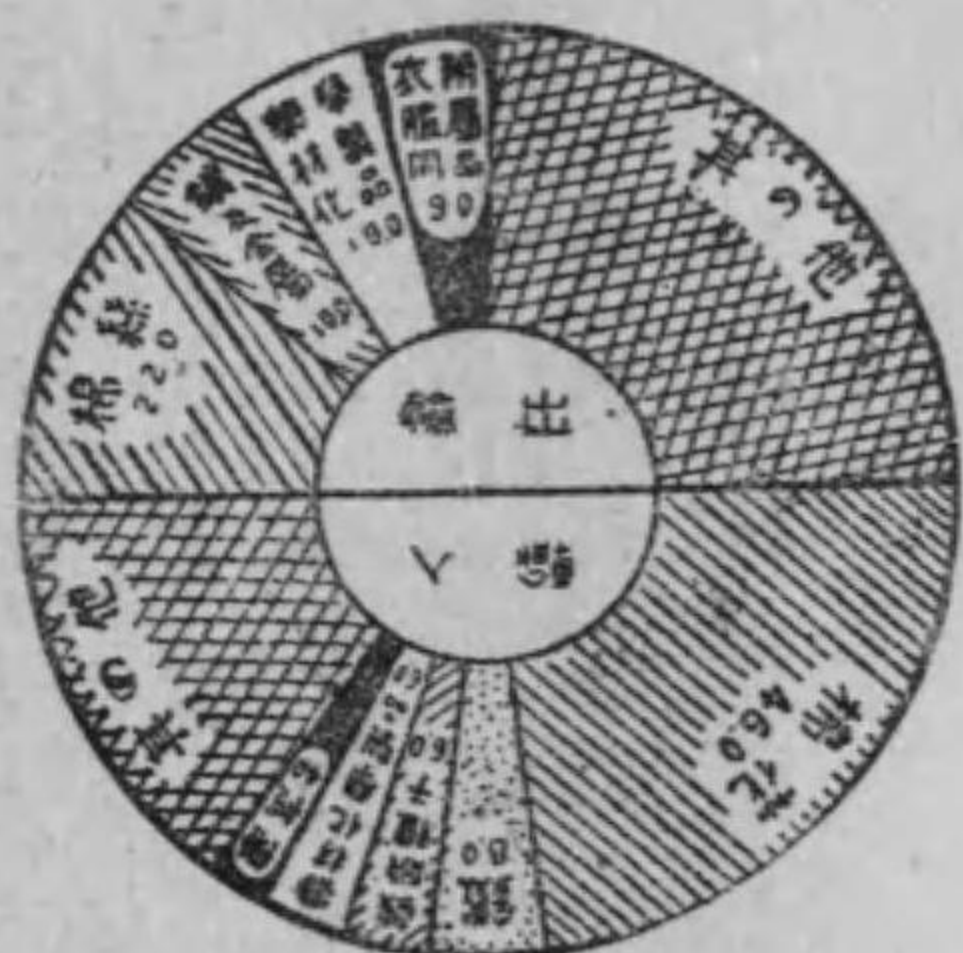
	大正元年	大正二年	大正三年	大正四年	大正五年	大正六年
輸 出	一五〇 <small>百円</small>	一七〇 <small>百円</small>	一六八 <small>百円</small>	一九八 <small>百円</small>	三三一 <small>百円</small>	四八〇 <small>百円</small>
輸 入	三〇二	三四七	二八二	二六九	三七四	五三一
計	四五二	五一七	四五〇	四六七	七〇五	一〇一一
輸 出 部	大正五年	大正五年	大正五年	大正五年	大正五年	大正五年
綿 織 絲	三九、八一〇 <small>千円</small>	二七、〇六〇	二〇、二八〇	一七、二六〇	一四、七二〇	九、〇四〇
銅	二七、〇六〇	二〇、二八〇	一七、二六〇	一四、七二〇	九、〇四〇	六、一五〇
綿メリヤス肌衣	二〇、二八〇	一七、二六〇	一四、七二〇	九、〇四〇	六、一五〇	
マツチ	一七、二六〇	一四、七二〇	九、〇四〇	六、一五〇		
綿 布	一四、七二〇	九、〇四〇	六、一五〇			
米	九、〇四〇	六、一五〇				
樟 腦	六、一五〇					
輸 入 部	大正五年	大正五年	大正五年	大正五年	大正五年	大正五年
綠 綿	一八四、六八〇 <small>千円</small>	三六、五九〇	一七、八一〇	八、六四〇	九、八四〇	七、六八〇
鐵	三六、五九〇	一七、八一〇	八、六四〇	九、八四〇	七、六八〇	四、二六〇
羊 毛	一七、八一〇	八、六四〇	九、八四〇	七、六八〇	四、二六〇	
藥 品 類	八、六四〇	九、八四〇	七、六八〇	四、二六〇		
豆 糲	九、八四〇	七、六八〇	四、二六〇			
機 械 類	七、六八〇	四、二六〇				
鉛	四、二六〇					

アンチモニー
陶磁器
貝鈕
硝子製品

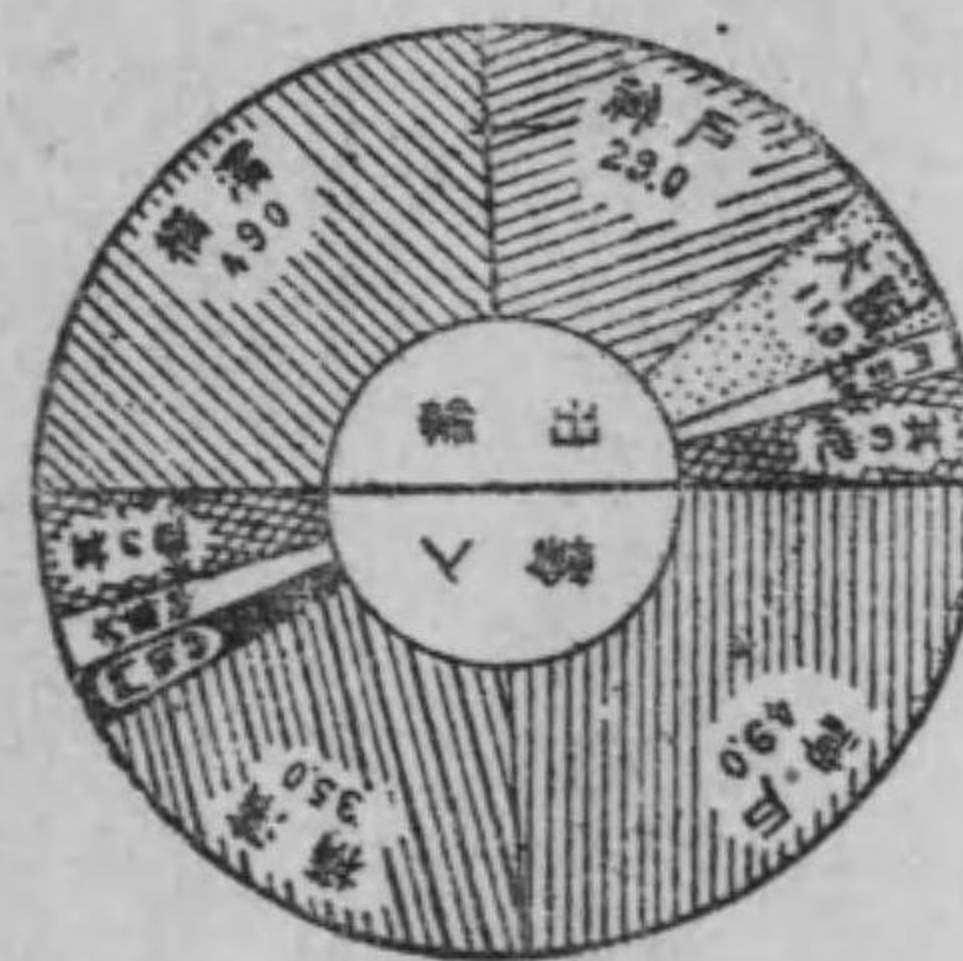
五、五一〇
五、二九〇
五、二〇〇
五、一七〇

ゴム
麻類
米
貝殻

二六〇
四、一五〇
二、八九〇
二、二四〇
二、二〇〇



神戸の重要輸出品



神戸内地貿易の地位

猶神戸の内地貿易港としての位置は上圖を留意して其の一般を知らしめるがよい。

2 神戸市街及神戸港を精細に観察させよ、

(イ) 林立する橋を

見せては、我が國第一位の港としての活氣を偲ばせ、將來に於ける神戸港の運命に關して想定させよ。

(ロ) 海岸に沿ひて横に長く、大阪に到るの間十里に狭長擴伸せんとする市街を觀ては、我が國

と神戸市の關係を想定させよ。

3 内地燐寸産出の殆んど七割は當縣に於て製出せられるのであるから其の盛況についても統計に依

つて知らせるがよい。

四、參考資料

1 神戸港に出入する内外船舶の數も年々増加し、本港を經由する航路は、日本郵船會社の歐洲線、米國線、濠洲線、孟買線を始とし、大阪商船會社及び日本郵船會社の清韓沿岸の航路も多くは本港を經由す。其他内國航路の臺灣線、瀬戸内海線等



内地寸主産地方

何れも本港に寄泊せざるものなし。毎年、入港船舶内國船二千隻以上二百五十萬噸以上。外國船二千二百隻以上四百萬噸以上也。(百科大辭典)

2 山陽線の兵庫停車場から岐れて支線に依れば鐘淵紡績工場(繰綿の設備整頓す)を側つて、三菱の倉庫及び同造船所工場に至る。又、兵庫の西部にある新川は、明治七年の起工で運河と共に交通の便を與へた事が大である。此の附近は福原郡址であるから平氏に關する古蹟が多い。又湊川は十數年前までは市の中央を南北に貫流してゐたが、今は河心を市の西郊に變じ、其の跡は遊園地及市街地となつてゐて、殆んど舊觀を呈してゐない。和田岬には、白色不動の燈臺、東波止場には不動緑色の燈竿があつて出入船舶を導いてゐる。

第五十七圖 春日神社 (第七十二頁)

一、主眼

春日神社の宏麗なる樓門及び近傍の老杉楓樹が數千の古色蒼然たる燈籠と相映してゐる邊、神鹿の悠悠遊べる景を觀察させ、往古藤原氏の榮華を偲ばしめる。

二、解説

1 本圖は春日神社南門の丹楹朱欄の亭々たる老杉と相映する様を描いたものである。春日神社は現境内三十萬六百二坪、同市橋本元標を距ること二町ばかりで鳥居がある、これを春日一の鳥居若くは大鳥居といふ。これが神社への入口である。一の鳥居より四百五十間ばかりで二の鳥居がある。境内幽邃の所に本社がある四殿より成つてゐる。

- 第一殿 武甕槌の命
- 第二殿 經津主の命
- 第三殿 天兒屋根の命
- 第四殿 比賣神

を祀る。延喜式神名帳に春日祭神四座といふのは是である。

2 本社は藤原氏の氏神にして代々皇室の外戚の神たるの故を以て最も旺盛を極め、行幸御幸等の例

も少くない。殊に藤原氏公卿の參詣するもの世としてこれなきはない。是を以て延喜の制には名神大社に列し、月次・新嘗の二祭に與かる。後又二十二社の一となり奉幣等の事常に絶えず。明治四年五月十四日官幣大社に列した。本社の大祭は毎年三月十三日、維新前は二月十一月の上申日に行つてゐた。其の祭儀の莊嚴なること實に目を驚かすものがあつた。又陰曆二月に臨時祭があり、同十二月に春日若宮祭がある。俗にこれを霜月の祭といつてゐる。崇徳天皇の保延二年に始めて行つた。本社は藤原氏の氏寺興福寺と境を接するを以て、神人等其僧徒と共に社事について強訴せんとするときは必ず神輿と共に神木を奉じて入浴した。朝廷ために節會を廢し、公事を停め専ら謹慎を表した。而して若し其の訴が聽かれざるときは藤原氏の公卿等舉りて參朝せんことがあつた。本社の境内には古來多くの鹿を養ふた。これを神使ツカシと稱し、殺す者は重刑に處せられたものである。

3 本神社殿は本社、中門、東西北御廊、捨廊、幣殿、直會殿、移殿、寶庫、南門、四面廻廊を合せて一廊をしてゐる。これ等の建築物は皆明治三十四年八月二日特別保護建造物に指定せられた。本社は四棟あつて創立以來五十二回の造營を閲したもので、嘉禎以來凡そ二十年毎に改造あり、慶長年間より毎二十年を以て式年造營とし、現米二萬石を費用の定額とした。今の社殿は文久三年の改築で明治十六年大修繕をしたものである。中門は一間一戸樓門、

屋根入母屋造檜皮葺で、其の左右側に接して東西の御廊あり、更に西廊の西端より折れて北行するものもある。これを北の御廊といふ。東西廊共に梁間一間、延長五間、北廊は梁間一間、延長六間屋根兩流檜皮葺である。

○**捻廊** 治承二年中門御廊同時に造立したものである。春日祭の時は内侍此の廊より昇殿するといふ。移殿正面中の間の前面北御廊廊南より第二の間に向ひ、斜に連結せる登廊で、梁間一間、桁行二間、屋根は兩流檜皮葺である。

○**幣殿** 清和天皇の貞觀元年に造立したものである。是は春日の祭の時勅使奉幣所である。今の建物は五間三面、單層屋根切妻造檜皮葺である。

○**直會殿** 一に八講屋といふ。社家記録に「春冬之兩季大宮祭祀、上卿内侍已下參向之時儀式執行殿也」とある。今の建物は八間三面、單層の檜皮葺である。

○**移殿** 一に内侍所といふ春日祭の時齋女内侍の參候するところである。今の建物は慶安三年の改造で五間三面の檜皮葺である。

○**南門** 元は鳥居であつたが治承元年八月四日播磨宿禰光親これを造立し、白河院御宇承保二年八月四日二階樓とせられたものである。今の建物は三間一戸樓門、屋根入母屋造檜皮葺である。圖はこの門を示したものである。

○**四面廻廊** 南廻廊は南門の左右に在る。各々長さ十一間。東廻廊は南廻廊の東端より屈折して長さ一間ある。西廻廊は南廻廊の兩端より屈折して延長五間で慶賀門に至り、更に進むこと九間にして清淨門に至り、又七間にして内侍門に至り、又六間にして止む。北廻廊は西廻廊の止んだ所より起り延長十五間ある。

4 圖中路の左は淺茅ヶ原で梅の木が多い。雪消の澤も程近くて若菜摘んだ往時の事が思ひ出される。この邊り群鹿が多く參詣客の袂を引いて食を乞ふてゐる。

賽路の左右には燈籠が多く其の數は三千といはれてゐる。二月節分の夜には悉くこれに點火するといふことである。

5 古來伊勢神宮、八幡社と本社を合せて日本三社と稱し、世人の信仰が厚い。

三、活用

1 本圖は教科書第七十二頁「奈良は……奈良時代七十餘年間の帝都たりし處にして……春日神社などあり」の解説圖である。歴史と連絡して其の大略を知らしめるがよい。

尙奈良の名所舊蹟に富んでゐる所としては、教科書に掲げてある正倉院、奈良帝室博物館、東大寺等があるから、それ等の寫眞又は繪葉書を提出して其の名勝地たることを知らしめるがよい。

四、參考資料

古より風光の勝れたるによつて著れてゐる。見渡せば水光穩で恰も鏡の如く、鹽津浦地の島、沖の島、双子島等其の上に横はり、名草山紀三井寺を翠微の間に望み、眞帆片帆は瀬海の翠松と相映じて一段の美を加へてゐる。

3 畫中右手の建物は觀海樓又は觀海閣といつて、この上に上つて海上を展望する事の出来る様になつ居る所である。

中央の塔はこれを多寶塔といつて佛舍利を入れた所である。

このあたりは一つの島になつて居て向の森のあたりとは石橋(不老橋)を以て相通じて居るのである。

この島山を妹背山といつて居る。

4 向ふの海岸(左方)に見える建物は片邊屋旅館といつて和歌浦一等の旅館である。

この海岸を行くと向ふには不老橋といふ石橋が架つてゐて片男波の海岸に至るやうになつてゐる。

三、活用

1 本圖は教科書七十三頁の「和歌浦の勝地……」の解説圖である。教科書の挿繪のみに甘せず寫眞又は繪葉書等を用意して以て其の風光の佳味はしめねばならぬ。

2 和歌の浦は随分古くから現はれた名所である。聖武天皇も稱徳天皇も御遊覽遊ばされた事もある。今の和歌の浦も聖武天皇が明光浦と名づけさせられてから起つた名前である。明光の浦はたしかに明

るい開けた氣持のよい景色に適合した名前である。然し今の和歌の浦は其の頃の和歌の浦の面影はない。この浦は海水が年々歳々干て行くために昔の入江も今は田島と變り、汀に生えて居つた松林も海嘯のために枯れたり、或は海底の藻屑となつてしまつたりして今は却て新和歌の浦の方が風景はよいので、遊覽者も却つて新和歌の浦の方に多いことは特説する必要がある。

げにや新和歌の浦は一眸よく和歌の浦、片男波海の彼方の紀三井寺一帯を納め得べく、踵を廻らせば鳴戸海峡の邊もかすかに見え、往きつ復りつする船の薄靄に包まれたる様はえもいへぬ眺めである。
3 和歌の浦は古來有名な勝地で詩歌に詠まれたものも少くない。

若の浦しほみち來れば浦をなみ

葦邊をさして田鶴鳴き渡る (萬葉集)

和歌の浦を松の葉にしてながむれば

木末によするあまの釣舟 (新古今集)

和歌の浦や入江のあしのしもの田鶴

かかる光にあはんとや見し (新千載集)

和歌の浦あまの鹽屋に烟たて

かすみの間より花ぞにほひし (夫木集)

以て其の風光を賞することが出来る。

四、参考資料

1 和歌浦の名、聖武天皇當國に幸し給ひしとき、勅じて登山望海、此眺最好、不勞遠行、足_レ以遊覽、故改_二弱濱_一名爲_二明光之浦_一、宜置_二守戶_一、勿_レ令_二荒穢_一云々、是より明光の浦と稱す。蓋し古阿と和とはかよつてゐて用ひたのである。後若浦を和歌浦に改めたのである。

2 紀三井寺は眞言宗の寺。西國巡禮札所の第二番也。金剛寶寺護國院と號す。紀伊國海草郡紀三井寺村和歌浦の東、名草山の半腹にして石燈二百餘級の山上に在り、光仁天皇寶龜元年唐僧爲光の創立と云ふ。爲光十一面觀世音の像を造りて安置す。寺中に三所の靈水あり。依りて三井寺と稱ふ。山門は永正六年に再建。本堂は十一間四面。(百科大辭典)

みあぐればさくら仕舞て紀三井寺

芭蕉

ふるさをはるくこゝに

ちかくなるらん

(花山天皇詠)

第五十九圖

米子の海岸より大山を望む

(第七十五頁)

一、主眼

米子の海岸より出雲富士、伯耆富士の稱ある大山を望ましめ、山陰地方の風光の美を味はしめる。

二、解説

1 本圖は米子の西北海岸から東南なる大山を望んだものである。前面の海は米子深浦で、中海の東南隅に當る海岸は波靜で、後には伯耆富士を負ひ巽に風光に富んでゐる。圖中雲表高く聳てゐるは即出雲富士伯耆富士の稱ある大山である。

2 大山は伯耆の中央に蟠る休火山で山頂は西伯郡に在る。東北方は爆裂し山姿整つてゐないけれども、西方より眺むると美なる富士形をなすを以て伯耆富士又は出雲富士(出雲から望んで此名がある)の名があるのである。山頂より東北に向つて二子山、船上山、勝田ヶ山等の支脈を出し西北に飯戸山・高麗山

米子より大山を望む



を出し、東南は兜ヶ山を経て蛭山群峯に連なる。いづれも皆火山質である。これ等諸山の占居する底面は略々眞圓をなし、直径は八里ある。裾野は頗る廣く綠草蔭の如くで、多くは牧馬場となつてゐる。西麓の庄内村及大山村には軍馬育成所がある。山頂に浅い水溜二三あるけれども舊火口と認めること

は出来ぬ。爆裂火口は峭壁環繞して僅かに西北に開口してゐる。最高點は六、一九四尺で、中國第一の高峯である。北は隱岐群島から南は瀬戸内海を望むことが出来る。此山は古へは大神山と稱して、出雲風土記に見えてゐる。

3 海岸に沿ふてゐる人家は米子町である。米子町は一に又深浦と云ふ。中の海の東南隅に位して港内水淺けれども松江と境との間にあるので、汽船の往來は頗る繁い。鳥取市へは二十三里三町、鐵道は境から來て東方に向つてゐる。

圖中町の中程に平屋造りの稍長い建物が見える。これは大阪商船會社の倉庫である。右端に近い森は川口神社の境内で、左の森の所には棧橋がある。

三、活用

1 本圖は教科書第七五頁の「……北部には大山を主峯とする一火山脈を通せり。地勢一般に高からざれども山岳丘陵いたる所に起伏して平野少し」と關連して取扱ふがよい。

2 大山の高峯なることは、北は海上遙なる隱岐諸島を望み、東は近く丹波附近の諸山より遠く白山方面を望み、南は瀬戸内海より四國島までも、西は三瓶山を始めとして中海宍道湖及出雲・石見の諸山を望むことが出来る。これによりて其の高峻であることを知らしめねばならぬ。

3 米子の中の海に於ける要津なることは地圖によりて想定せしめるがよい。此地方の要津たること

は大阪商船會社の倉庫から考へさせても分る。

4 大山の裾野に軍馬養成所のあることは是非述説するがよい。

第六十圖 隱岐のいかつり船 (第七十七頁)

一、主眼

西郷港に於ける烏賊釣船の出動の狀を觀察させ其の釣船の數多きことより烏賊釣の盛なることを知らしめる。

二、解説

1 本圖は隱岐の西郷港に於ける漁船出帆の光景である。畫の手前に見える人家は即ち西郷港の西町の一部である。西郷港は隱岐國第一の名邑で周吉郡八尾川の川口にある鳥廳及び區裁判所郵便電信局、稅務署等がある。元當國々府のあつた所で徳川時代には松平侯に屬し此の地に陣屋を置き新府といつてゐた。東西廿五町南北七町水深は十仞で船舶は常に出入する。松江市を距ること海上六十里同島知夫里港へ二十二里ある。

圖中左中央部に小さな四角形を連ねたやうなものが見えるは錫製造天日乾の實況である。又右手前は八尾川の下流である。本川は本島第一の長流で長さ三里十八町ある。

猶圖の上方で右の山は愛宕山左の山は金峰山である。愛宕山と金峰山との間は西郷港の最も狭い所で幅員百六十七間しかない。

2 海上點々たる船は漁船である。烏賊釣船は夜中作業するものである。本圖は夕方出帆してゐる光景である。これ等の漁船は翌朝出帆するのである。

隠岐の鯛は中國地方の名高き産物の一である。暮雲海を罩むる頃數十艘の烏賊釣り船が漁歌面白く海上を壓して出動する様は眞に偉觀である。漁場は陸より一里乃至數里の沖合である。漁具はフタマタ、ハジキ、ソブキ等を用ひる。漁場に至ると各船は皆錨を投じて烏賊の群の在否を探り、これを附近に引きつけ前記種々の漁具を用ひて釣るのである。大漁の時は兩手の活動迅速で間斷なく釣り上げる様は太鼓を打つ時の桴の如くであるといふ。夕暮から夜の明け離れる頃までには二三百尾より多きときは八千尾に至る漁獲があるといふ。

三、活用

1 本圖は教科書七十八頁の「水産物の中産額の最も多きは 烏根縣の鯛 其の名著る。」の解説圖である。其の釣船の數十出帆する狀及其の製品を天日乾してゐる所を觀察させて其の盛な様を知らしめるがよい。

2 本島に於ける「いか」漁業は年々豊凶はあるが鯛として輸出するものをあげて見ると次の通りである。

ある。

大正元年	貳拾萬圓
大正二年	參拾貳萬七千圓
大正三年	拾九萬五千圓
大正四年	貳拾八萬九千圓
大正五年	四拾萬八千圓

これによつても如何に本島に於ける鯛の漁獲の大なるか分る。猶最近五ヶ年間の我國鯛の製造高平均價格を示して見ると

錫産出高五ヶ年平均價格表

地方	數量	價格
長崎縣	三三〇、二二五	五七四、〇七六
岩手縣	二六四、八四八	二五六、五〇四
北海道	三二二、八五三	三四二、六七〇
新潟縣	二八七、〇八〇	三三四、七二七
島根縣	二二一、四〇〇	三〇二、三八九

青森縣	山口縣	大分縣	佐賀縣	富山縣	鹿兒島縣	石川縣	兵庫縣	其他	合計
一四八、七九三	一三一、二九二	九六、一七八	八三、六八一	八〇、二七二	八七、九〇一	七二、七〇〇	六九、一一六	三九〇、四三二	三〇六一、三八一
一四五、四〇三	六四、〇二八	二三、六六九	四一、一〇一	七一、八一二	三五、三九九	五四、五二九	五二、三二三	二七〇、〇二二	二一八四、六八三

四、參考資料

3 錫の製法については時間の都合により其の大略を知らしめるがよい（參考資料参照）

1 錫。錫の原料となる鳥賊の種類は甚だ多けれど其の主なるものは「ヤリイカ」「スルメイカ」「マイカ」「アフリイカ」等である。

これを製するには先づ庖丁を以て其の胴を腹の方で割き又頭を割つて内臓と眼球とを去り輸出向のものは胴の中央にある軟骨を去ることなく、内地向丸形製のものにはこれを去る。次に海水又は鹽を加へて作つた鹹水でよく洗ひ、最後に淡水で洗淨し、頭が胴に接する部分に繩をかけて半乾燥させ、竇の

上に排列して乾燥した後展伸或は壓を加へて其の形を整へるのである。鹹水で洗淨すると附着してゐる汚物が去り易く又乾燥の後過度の乾固を防ぐ効がある。製品は大小によつて選分け略同大のもの十枚を一組としよく重ねて把束とする。

錫の製品は凡そ次の八種ある。

- (1) 磨錫又磨上々番錫。大なる「ヤリイカ」を原料として其の薄い表皮を剥ぎ取りて製したものである。上々番とは大なるものについていふのである。
- (2) 一番錫又上々番錫。形の大きいものをいふのである。
- (3) 二番錫。「スルメイカ」を原料として輸出向に製したものである。
- (4) 尾吼錫。二番錫に同じき乾燥のとき貫いた串跡の穴が胴の一方に存するものをいふのである。隠岐の特産である。
- (5) 於多福錫又は圓番錫或は丸形錫。内地向製品で中骨を去り肉を左右に引き伸して胴を圓く製したものである。原料は「スルメイカ」である。
- (6) 甲付錫。「マイカ」を原料として甲の付いてゐるまゝ製したものである。
- (7) 水錫。「アフリイカ」を原料として製造したものである。
- (8) 袋錫。胴を割くことなく頭を去り薄皮を剥ぎ取り胴を袋形に製したものである。丹後の特産である。

我國錫の生産地で著名な所は豊後の佐賀關對馬及肥前の五島、平戸、筑前の唐津、隱岐、佐渡、伊豆、陸前の氣仙地方、陸中及陸奥の南部函館、松前の諸地方である。概して九州地方は大形の錫を産し品質も亦よい、北部は産出量多いけれども小形のものに限られてゐる。

錫は我國水産物輸出品中第一位を占めてゐる。現今支那、英吉利領海峽植民地、オランダ領印度、フランス領印度等に輸出せられて其年額は一九八四、二二三圓に上つてゐる。

六十一圖 岡山附近に於ける花筵の荷造り (第七十八頁)

一、主眼

花筵荷造りの様を觀察させ、岡山附近に於ける花筵の生産狀況を知らせると共に、之れが海外輸出の好氣をも推定させる。

二、解説

- 1 本圖は岡山市天瀬町磯崎花筵合名會社内、荷造り部の一部を描いたものである。
- 2 背後の建物は、雜舎であつて倉庫ではない。本圖の最も左方で手前の人は表を包む可き薦を解いてゐる所。其の後方、左に向き、桐紋の表を手にする人は、表の耳を調整してゐる所で荷造の第一作業である。此の作業を終へたものは、圖の最右前方うづくまる人の所に送られて目方を調べられる。

目方が檢せられて後、二卷を一箇の荷にする。即ち、本圖に於て二人共同せる作業はそれである。かくて、荷造りが終れば右方隅に見える車力の方へ運ぶのである。圖に見える左方隅から荷造られたものを肩にして、運べるは少々考へ得られぬ描き振りである。(此の動作を以て背後の建物を倉庫と推定するは誤りである。)

前方に積み重ねられた表は錦莞筵(岡山備前の特産で輸出向き。細い葦で織られてあるから小倉織のやうで、而かも無色であるから頗る美しい。)で、左方に積まれてゐるのは普通の花筵である。此方に轉つてゐるのは綱。

3 此の荷造りは假送りで、此の儘神戸に送られる。(岡山から荷造りして造るものは錦莞筵に限られてゐる。但し、現今では野草筵が輸出の過半に及び、錦花筵以上に輸出されてゐる。)神戸には花筵検査所があつて、一々検査し検査合格済のものは、改めて荷造りをなし、茲から輸出するのである。

4 花筵を製造するには織物と同じ様に機にかけて織るのであるが緯に蘭草を用ひ、經には殆んど木綿糸を用ひる。丁度、機に依つて布を織るが如くに、蘭を一本宛挿入して織るのである。長さ二十間に達すれば、機から下してクル／＼と巻いて一卷とする。錦莞筵は無地であるが、地方に用ひるものには模様が澤山ある。是は矢張り、機に仕掛けがあつて、之れに應ず丹青着色の蘭を用ひ、茲に出来るのである。近時は、染色の進歩につれて、型付け模様が深い様である。是れは友禪染と同様に、

厚紙に種々の花鳥草木山水の模様を彫刻し、白地の花筵に置き、其の上から染料を刷毛にて摺り込むのである。しかし、是れでは不完全であるから一度蒸汽に依つて蒸し、着色の色合を美麗に光澤あらしめるのである。此の種の輸出高も餘程激増してゐる。

5 花筵の種類。

- (イ) 普通 幅三尺、長さ百二十一尺物。
- (ロ) 廣幅 幅三尺以上の長方形若くは、角形の物。
- (ハ) 短尺 長さ三丈以下にて十八平方尺（幅三尺長さ六尺）より大なるもの。
- (ニ) 小物 十八平方尺以下のもの。

6 検査數

種類	明治四十四年	大正元年	大正二年	大正三年
普通花筵	四六七、六四六	四五二、八四九	四九三、二〇〇	三二五、六二七
廣幅花筵	八四〇、八四〇	五四〇、〇六〇	七九三、九九七	四七六、五九九
短尺花筵	二、八七六	二、八七六	一三、八八二	一、二七五

大正三年の激減は歐洲大戰亂の爲めである。

三、活用

1 花筵は岡山縣の特産で、其の南部地方は一帶に此の業が盛んである。此の盛業を知らしめるには到底此の挿繪の如きものでは満足が出来ぬ。少くも、蘭草刈取の實況か、機場の盛況かを示すべきである。故に此の考を以て、此圖を擴張的に活用せよ。

2 若し夫れ、五六月頃山陽線に依つて岡山驛を西下せんか、鐵路の兩側は寸隙をも餘さずして青蠟一面なるを見る。是れは明らかに蘭であることがわかる。西下に從つて、倉敷、庭瀬驛に停れば驛倉庫の一棟に満充されたる花筵を見るのである。斯様な實景に就いては補説の必要があると思ふ。

3 尙ほ、其の盛況を知らしめる一斑として次のやうな統計を用ひる事もよい。

年次	花筵		工數	量	價額
	製造戶數	職			
大正四年	八六三	七、二三四	一、一五八、九四〇	一、〇九六、九四〇	
同五年	九六二	一、二、一一一	一、〇八三、二五五	一、八三〇、七五三	
同六年	一、〇四三	一、一、二九九	一、〇八三、二五五	一、八四四、四〇七	

4 花筵の輸出方面や其の額をも知らせよ。

方面 北米合衆國（出額の七割）。英吉利（出額の一割）。支那。濠洲。加奈陀。佛蘭西。香港。海峡殖

民地、蘭領印度。

輸 出 額	
大正元年	三、七四二 <small>千円</small>
大正二年	四、〇五四 <small>千円</small>
大正三年	二、八一四
大正四年	二、二八一 <small>千円</small>
大正五年	二、八六三
大正六年	二、一八〇

- 我が國に於ける主産地は、岡山、福岡、廣島、香川の四縣である。
- 岡山に於ては、目今、錦莞筵よりも野草筵の方が生産活氣がある。附言の必要がある。(野草筵はもと北米合衆國に於て我が國の花筵を壓倒する爲めに發明されたものであるが再び岡山に於て、稻の葉を用ひて品質精良のものを造り出し、逆に米國を壓して盛んに輸出してゐる。其の形色は、ダンツト少しも差異がない。安價で秀美であるから米人は盛んに歓迎するさうである。)
- 參考資料を參看して綿絲、綿織物、疊表、麥稈眞田の産額をも知らせよ。

四、參考資料

- 花筵發明者磯崎眠龜翁。
天保五年十月備中國都窪郡茶屋町に生れ、早く父母を喪ひ、壯年の頃、江戸にて領主戸川伊豆守に仕へて居た時、外國船が品川灣頭に來往し、文明の利器の數々を使用してゐたのを見、己れも何か工夫を考案せんと心に決めた。間もなく郷關に歸る。其の途、大阪で西洋綿絲機械を購ひ歸り、自ら小倉帯

綿 絲 紡 績					
年 次	工 場	職 工	工 重	量 價	格
大正四年	一〇	八、七〇七	六、八〇〇、〇九九 <small>円</small>	一五、八九九、六二一 <small>円</small>	
大正五年	一〇	八、九七八	七、八〇三、一二六	二五、五七八、一九八	
大正六年	一〇	一〇、四九〇	七、四九六、〇九六	四一、五二一、二九八	
品 名	大 正 五 年	大 正 六 年			
廣巾白木綿	三、八、二二七、五六六 <small>円</small>	五、八、五四、九二七 <small>円</small>	四六、七三八、九四八 <small>円</small>	九、五五五、七七三 <small>円</small>	
白 木 綿	三、三三一、一七九	一九六、〇五二	二五九、六四五	三六四、七八〇	

を織成した。所が意外に聲價を博した。明治九年に及び、蘭蓆織機の改良を圖り、箴と綾取りの發明をなして、精巧優美のものを作り出した。更に鹽基性染料蘭草煮染の染方を發明し、明治十一年五月に至り始めて錦莞筵を製作した。翌十二年錦莞筵の見本を携へて神戸に行き、輸出の途を求め。十四年一月始めて神戸の濱田篤三郎から注文を受け、英國へ初輸出をする事となつた。爾來各國から多額の注文を受けるに至つた。實に同氏は、花筵界の功勞者である。併し、其の間の辛苦は一通りでなかつた。

2 岡山縣に於ける主産物産額を左に示さう。

年次	製造戸數	職	工疊	表	莫	産
大正四年	九、六八二	一〇、八一二	六五六、〇九一	一七、六九一		
大正五年	九、四二八	九、五〇八	七八一、六六二	二六、八一七		
大正六年	一一、三四七	一一、四七三	一、三八二、四六二	六七、〇〇五		
合計						
腿帶子	一、八二九、一五〇	一、〇九七、九二〇	三、二二一、四三二	二、八八〇、二七九		
雲齋	六五〇、一二〇	八五六、六五三	七四二、〇二一	一、二九一、四〇〇		
小倉洋服地	三二九、三六〇	八五一、八三四	七八三、七五五	一、四七三、七〇七		
二子綺木綿	六〇〇、八〇六	七二一、三〇四	七一、一一九	一、〇七五、三八一		
織色木綿	五二五、六一三	三九三、一八三	六八七、八九二	七一八、六一三		
袴地	二四二、八六六	三四四、三六八	二六八、五〇三	四八四、七三五		
帶地	一、四二五、九八六	二〇五、三三八	七四三、七〇八	一四一、二〇七		
其他		九八三、六三三		九九八、五七二		
合計		一一、四六九、二〇八		一八、九八四、四四七		

二八四

疊表、莫産

年次	製造戸數	職	工疊	量價	額
大正四年	三三二、二〇四		八四、〇七七	四、五八一、三四七	五六八、三一五

麥稈經木真田紐

大正五年	三三三、三二五	一一〇、七七二	八、三九二、二〇九	一、六〇九、二一〇
大正六年	三三三、五四九	一二六、一九一	一〇、四〇五、一〇〇	二、二九三、八八四

第六十二圖 下關海峡にて貨車を運べる船 (第七十九頁)

一、主眼

貨車運輸船の觀察によつて、本邦交通機關の特別な仕掛けを知らせると共に下の關海峡の般盛を知らしめる。

二、解説

- 1 本挿繪は、下の關から門司の西部（福岡縣企救郡の大里）に向つて貨車を積んだ連絡船が進んでゐる光景である。
- 2 前方の市街は門司市一帯である。海中先導に立ちて煙を出し乍ら進み行けるは關門連絡船で、其の後方から曳れて行くのは、貨車三輛を積める船である。此の船の後部に居る人は此の貨車を世話する驛員。更に其の後方の和船は解船である。
- 3 山陽線で來た乗客は、關門鐵道連絡線に依つて門司へ渡るのであるが、貨物車は一々荷物の積卸をするの煩に堪へぬから圖の如く、貨車其の儘を曳船に依つて對岸に送るのである。九州線から山陽

二八五

線に渡るにも同様である。貨車船は甲板の平たい船で其の中央に陸と合する様にレールが敷かれてある故に此の船が陸に着けば陸のレールと合連し、貨車は自由に上船上陸なし得られる。貨車は普通一輛八噸乃至十二噸であるから、一船に二三輛を載す事が出来る。載せた船、一艘又は二隻を並べて、一小蒸汽船が對岸に曳くのである。かくて、山陽線と九州本線とは連結する。

4 下關は本土と九州との交通要點たると共に、朝鮮又海外との要點である。のみならず瀬戸内海の入り口で、我が國須要の交通都市である。而して、下關門司間は僅に十五分間で山陽本線と鹿兒島線とを連結し、山陽線と朝鮮鐵道とは、海上十一時間（毎日二回の連絡船便がある。）で釜山に於て連結してゐる。

5 下關海峡は馬關海峡とも言ひ（昔穴門と言つた。）瀬戸内海の西門に當り、重砲兵隊が守つてゐる。しかし甚だ峽小の門戸で、海水の爲め、埋淺するから、毎年莫大の費用を使つて、掘つてゐる。近時海底地下トンネル鐵道企劃され、巨費を投じて數年中に着手さるゝ筈。

三、活用

1 此の貨車運搬船は海底トンネルの完成と共に宇野・高松間の交通・運搬に轉せられるやうになつてゐる。此の挿圖はともあれ下關海峡の擴大略地圖を示し、交通の衝路たる事を授けよ。

下關海峡の圖



2 本邦交通機關の特別仕掛けを知らせよ。

(イ)此の挿繪は何にしてゐるのか。

(ロ)後の船は何にか。

(ハ)何故、斯様な事をするのでせう。

(ニ)是れは何處の挿繪でせう。

かくて、關門間の交通の頻繁なる事を了察させるがよい。

3 關釜連絡線、宇野高松間の連絡線に就いても補加説述せよ。尙、尾道、宇品、絲崎港の盛況を語ると共に瀬戸内海の交通繁しい事をも附言し、海事思想を養へ。

四、參考資料

1 下の關は、室積の對岸なる上の關、三田尻の西南なる中の關に對する名である。本州最西南端に位し、形勝天與、交通上、軍事上樞要の地を占めて居る。一開港場。市街は帶の様に海岸に連り、街衢狹隘。富賈豪商多く人口五萬六千。貿易額一三、一八三、三八三圓（内輸出一〇、一九一、九八〇圓）重要輸出品。綿織絲（一、一七七千圓）、清酒（七二三千圓）、紙卷煙草（三九六千圓）、輸入品。大豆（一、〇一八千圓）柞蠶絲（四

五九千圓)牛皮(二六三千圓)米(一六四千圓)。

- 2 市内の春帆樓(阿彌陀寺町の北、紫石山の麓の旅館)は日清役の媾和會議があつた所で、李鴻章と我が伊藤博文、陸奥宗光が平和條約を結んだ。外濱町の引接寺は當時清國全權一行の旅館にあつた。
- 3 赤間宮は阿彌陀寺町にあつて官幣中社で安徳天皇を祀つてある。昔阿彌陀寺があつた。文治の役安徳天皇此の地に薨せらるゝや土民、本堂の前に葬り、御影堂を建て、本寺を勅願寺とした。明治八年赤間宮と號して、官幣中社に列す。左方に壇の浦の古戰場がある。後方の山には、平氏の古塚がある。——平家七墓(清經、經盛、資盛、敏經、知盛、教經、宗長。)
- 4 壇の浦は市の東端にある。文治二年平家の一門、安徳天皇を擁して茲に最後を遂げたのである。安徳天皇御製、

今ぞ知る御裳濯川の流れには

波の下にも都ありとは(二位尼)

なまこにもならで流石に平家蟹

梅翁

第六十三圖 嚴島神社 (第八十一頁)

一、主眼

天下勝景の地、日本三景の一たる嚴島神社を觀察せしむ。

二、解説

- 1 本圖は廣島灣の一部、大鳥居の西方海上から嚴島を眺めた所である。
- 2 前面に見えるのは大鳥居で正面の社殿は、本殿。其の左右は樂房。更に其の左右は廻廊であつて屈曲全長、百四十八間三尺。一間毎に鐵の燈籠を吊してゐる。左方、森の中に見える石燈籠は、參拜通路の傍にある。圖中に見えない右方の海岸の燈籠を合計すれば百八ある。本圖の左方は有之濱とて、茲には、連絡船の發着所がある。其の上方は梅林である。背後の山は彌山一帯で鬱蒼繁茂の雄姿は社殿の美と相俟つて雅趣に富んでゐる。
- 3 嚴島は宮島とも言ひ、廣島縣佐伯郡に屬する瀬戸内海の一島である。廣島から西南方十三哩の宮島驛を距る海上僅かに二十一町の南方にある。連絡船は十五分時にして吾等を其の景中の人たらしめる。
- 4 本社は市杵島姫命を奉祀する社で田心姫命湍津姫命の二柱をも配祀してある。市杵島姫命は、日本紀にも見えてゐるやうに(天照大神、乃索取素盞鳴尊十塚劍一打折爲三段濯於天真名井、結然咀嚼而吹棄氣噴之狹霧所生神號曰田心湍津姫、次市杵島姫、凡三女矣云々)天照大神と素盞鳴尊とが劍と玉とを以て、互に御誓約なされた時、御生れになつた神である。田心湍津姫を加へて三女神と

が劍と玉とを以て、互に御誓約なされた時、御生れになつた神である。田心湍津姫を加へて三女神と

申す。大御神は天孫降臨の時守護神として、三女神を宇佐島に下せられた。爾後此の神々は皇室國家の鎮護海上守護の神として上下共に篤く尊崇し奉つた。

二九〇

5 社傳に依ると、嚴島神社は、今から千三百餘年前推古天皇の御宇宣旨を蒙つて鎮祭せられ、嵯峨天皇の時、弘仁二年本社を名神に列し、祈年祭、月次祭、新嘗祭、相嘗祭の一箇年四度の例幣を奉る醍醐天皇の時名神大社に列し、後白河天皇は建春門院と行幸あらせられた。清盛は、特に本社に對して衷心崇敬の至誠を捧げた。嚴島が天下に名を得たるも一つは清盛の力である。清盛は月に一回及事ある毎に祈請した。故に此の頃大營繕が行はれ、未曾有の宏壯雄麗な社殿が出来上つた。

後、戰國の世、毛利元就、崇敬敦厚し、社殿營繕、諸種物品の寄進をした。又、豊臣秀吉も尊崇し、夫の偉觀、千疊閣は天正年間に秀吉の造營したものである。江戸時代、淺野家の所領となるや、領内第一の崇敬社として尊崇された。

明治四年國幣中社に、十八年明治天皇行幸、二十八年昭憲皇太后の行啓があり、今上天皇陛下は皇太子當時數度行啓遊ばされ、四十四年には官幣中社に列せられた。

6 大鳥居は、本社之棧廊から八十八間の前面にある。高さ八間三尺七寸（柱の高さ七間二尺五寸）二柱の距離、五間八寸、棟の長さ十二間一尺七寸、副柱の高さ四間五尺、満潮の時には白帆風をふくんで之れをくゞる事が出来干潮には一帶砂濱となつて、介魚を拾ふ人や、鹿などが歩んでゐる。

楠の木材で朱塗りである。柱下端の周圍東柱（向つて左）は二丈七尺。西柱は三丈三尺。

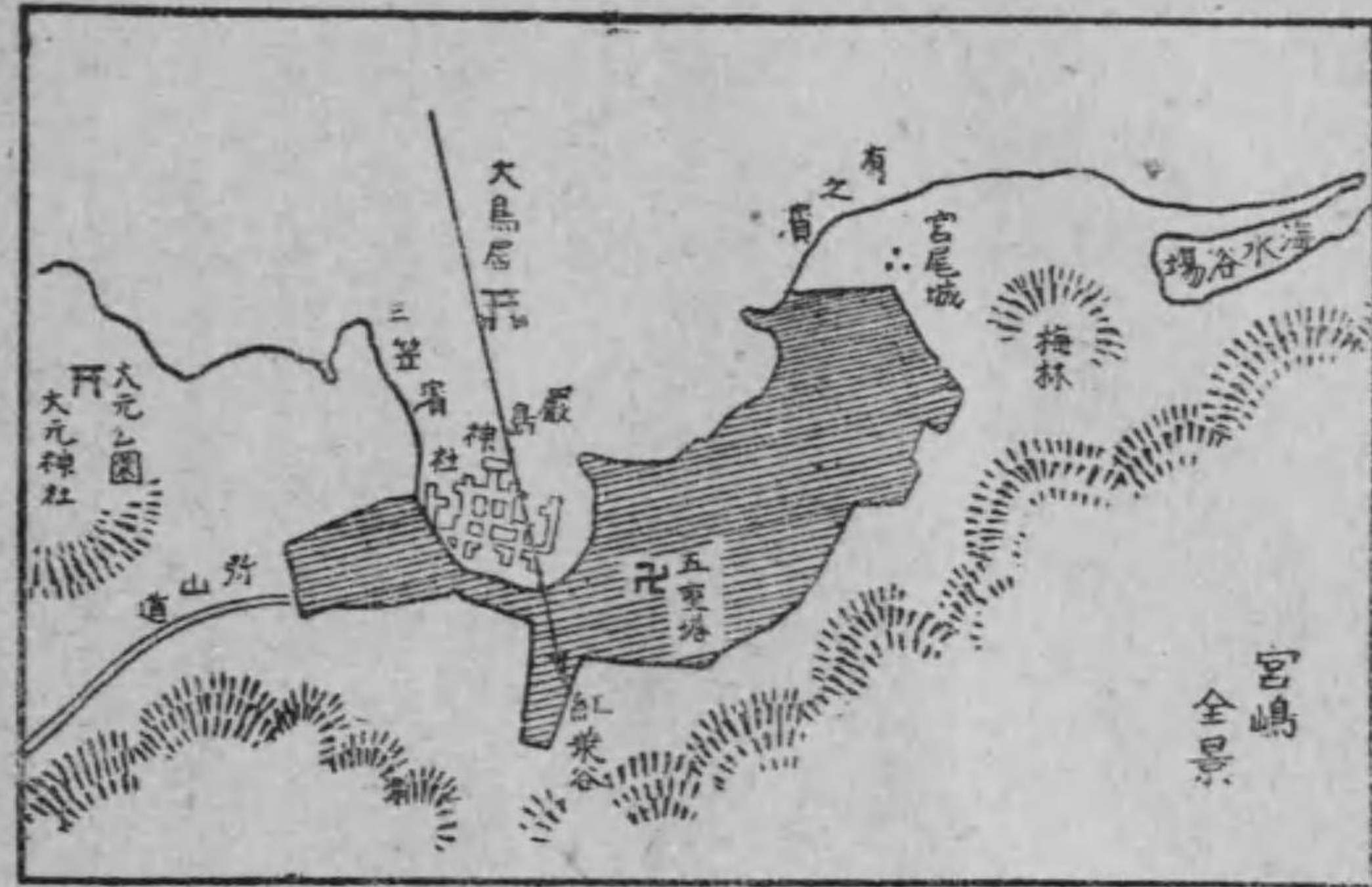
7 嚴島神社特別保護建造物

(イ)本社之分_二本殿、幣殿、拜殿、祓殿、樂房、廻廊、朝座屋、能樂臺、楮掛、能樂屋、平舞臺、内侍橋、揚水橋、長橋、反橋。

(ロ)客神社之分_二本殿、幣殿、拜殿、祓殿。

(ハ)其の他_二大鳥居、大國神社本殿、天神社本殿、荒胡子神社本殿、塔婆（五重塔）、多寶塔、千疊閣（豊國神社）。

8 官幣に預る大祭は祈年祭（二月十七日）例祭（六月十七日）新嘗祭（十一月二十三日）の三日で古來由緒ある例祭は是れ以前で、管絃祭と延年祭とは、特に名高い。管絃祭（舊六月十七日）とは、和船三隻を並べ連ねて屋形を設け、午後五時頃之れは御神輿を奉安し、神職伶人倍乗して、本社正面の廊嘴から漕ぎ出し、管絃を奏しつゝ、對岸の攝社地御前神社サシマに神幸あつて、同夜十一時頃還御せらるゝの盛儀である。管絃船には幔幕を垂れ、鉦を立て、榊枝には鏡をつけ、提燈を吊し、誠に美觀である。古來御とも船千艘とて船海に満ち、又陸には人の山をなし、海陸共に雜沓す。延年祭（八月望より四日目）は一つに玉取祭といひ、豫め本社正面の海中に四本柱を立て、中央に地盤を吊り、木製寶珠を掛け、當日晝間の満潮を以て祭禮は始る。定刻を報ずれば、數千の男子裸體となつて海中に入



り、競つて柱に攀ぢつ、玉を奪ふ。參觀參拜者十數萬人に及ぶと。

三、活用

- 1 壯大なる鳥居と、優雅な社殿と鬱蒼たる彌山の秀姿とを觀察させて、日本三景の一たる所以を明瞭にする。
- 2 名勝の地であるから、教師が實地見聞した事を語るがよい。

宮島は周廻七里餘、山水秀麗にして、樹石幽邃、周圍に七浦八景の名勝を有し、春は大元の櫻花、夏は龍宮の水景、秋は紅谷の鹿の聲、冬は御笠濱の雪の景色、周年季として佳ならざるはなく、雨に風に朝に夕に、氣象萬化、洵に宇内の勝區である。外人の我が國に杖を引く者、瀬戸内海を見て世界の公園と激賞するが更に瀬戸内海、生粹の一所に集まる所、之れを宮島とはするのである。宮島絶勝中常に人をして恍惚たらしむるものは、館海を隔て、千古の綠色を帯ぶる宮島を背

景とし、白砂青松に擁せられつ、海中に立つ大鳥居を透して海上に浮ぶ嚴島神社即ちそれである。丹塗宏壯の社殿は、百八間の廻廊に連り、其の青、其の赤、こもく至り、自然の好景と、人工の粹と相融し相調和する所、洵に一大繪巻物の展開かと思はしめるのである。嚴島神社を參拜したもの、必ず話題となるものは、總燈明と、御島廻りである。本社の前には、澤山の御燈明臺があり、百八間の廻廊には、間毎に鐵燈籠が懸けられ、御笠濱、西松原、大元浦、長濱など其の白砂青松の間には、無數の石燈籠が立つて居る。此れ等凡てに燈明を點するを總燈明と言ふのである。月暗く、満潮の折、之を遠くに望めば、熒煌として、星の如く、海面に反映する好景は、洵に天下の美觀として萬人から憧憬せらるゝ所である。次に御島廻りであるが、之れは和船に乗つて、嚴島を一周し、松浦、鷹巢、腰少、青海苔、山白濱、須屋、御床等七浦の勝を探り乍ら各所、七浦七ゑびすを巡拜することを言ふ。(八束清貫)

四、參考資料

- 1 帝女祠壇冠=大東。
 - 步虛人遇三山雨。
 - 何處風簾臺殿上。
 - 浪搖=鰲背=滄州遠。
- 瑤池琪樹繞=珠宮。
 - 採藥舟回七浦風。
 - 長時層市海門中。
 - 孰識神仙此地通。

(釋 周 獎)

- 2 宮島や燈籠の火にあけやまし
うみ涼し百八灯のほしのかげ
みちしほに月より上の宮居哉
安藝の宮島廻れば七里七浦七夷

其 角
不 言
宗 長
(俗 謠)

第六十四圖 出雲大社 (第八十二頁)

一、主 眼

古來の名社たる出雲大社の宏壯なる全景の觀察に依つて、三千年の古昔を想起させ、大國主命の偉業を追慕させる。

二、解 說

- 1 此の挿繪は出雲大社の境内の西南から、其の正面及側面を描いたものである。本社は出雲國簸川郡杵築町杵築東に在る。
- 2 此方の木は老松。手前の大なる建物は、拜殿。四圍には御紋付の幕が張つてある。拜殿の後方、提灯の見える門は八つ足御門。

其の左方に見える垣は瑞垣で八つ足御門から左右方形に圍んで居る。

八つ足御門の奥に見える建物は矢張り拜殿で判任官同相當官以上の禮拜する所である。最も奥の屋根に千木、堅魚木の見えるのは本殿で明治七年の造營にかゝり、其の高さ六丈五尺。此の上に千木、堅魚木いかめしく高く立つて神々しい。本社の左に少し棟の見えるは神饌所である。

背後に見えるは八雲山であつて、鬱蒼として茂れる様は社殿の壯大と相映じて、崇高の感を起させる。拜殿の左方に柵を繞らして邊に樹木の茂れるは御饌井。

3 拜殿の前方に右から左へ(東から西へ)通つて居る道は石畳である。此の石道を西へ詰めれば、社務所がある。

此の境内の南、石段を下つて西方には司宮職千家氏の邸がある。

4 出雲大社は古くは出雲大神宮(古事記、日本書紀)石祠之會宮(古事記)、天日隅宮、嚴神之宮(日本書紀)、天日栖宮(出雲風土記)出雲宮(八雲抄)杵築大社(延喜式)杵築宮(大日本國一宮記)とも言つた。祭神に就いては異説があつて、或は、素盞鳴尊或は大己貴命といふ。正しく、大己貴命(大國主命)で後、素盞鳴尊を合祀したものであらう。

大國主命は國土を天孫に獻じてから、出雲國多藝志の小濱に退隱された。之れぞ今の杵築の大社である。

三、活用

1 此の挿繪は名所舊蹟、而かも我が由緒ある歴史的神社としての大社を知らせんが爲めに挿入したものであるから、宏壯森肅なる挿繪の觀察に依つて、敬神の念を起させよ。

2 教師の參拜談を話せ。

「杵築町の中央より馬場大鳥居を過ぎ、小坂を下れば老松道を挟んで翠色滴る如く、老樹蒼鬱たる八雲山は西に屹立す。而して、大社は其の山麓にあり、是れ即、杵築宮なりとす。今は官幣大社なり。今老松の間を過ぎ、毛利公寄進の青鳥居を過ぎ、本社に參拜すべく正門、八足門に至れば、左甚五郎の作と稱する葡萄と栗鼠の浮彫あり。入れば右に歌祭樓あり。大社の各種の寶物を藏す。殊に後醍醐帝の琵琶、足利義滿の甲冑、秀吉の大刀等皆國寶也。正面に於ける本殿は本邦に於ける尤も古代に屬する建築法にして祠宇の構造全く他の神殿と異り、椽木高く聳え不均齊式の構造甚だ奇にして、而かも頗る壯觀なり。昔時は其の縁の高さ三十二丈に上れりとぞ。此の古風の社殿を見て、自ら襟を正ふし、自ら神威の高きを覺ゆ。」

3 斯くの如き名所、舊蹟の挿繪を取り扱ふ時には少々極端に流れても、兒童をして「一度踏査參見したい。」といふ態度に出でしめ、遠足旅行探地等の習慣を作る事もよい。

4 歴史と連絡せよ。

四、參考資料

- 1 調天日隅宮。廣瀬旭莊、
午寂中庭不見人。寒禽相喚集松筠。
山形對峙分龜鶴。地勢孤深宜鬼神。
千歲祭儀今猶古。四時穀種嘗新。
祠官家目荒洪世。豈管東蒙社稷臣。
- 2 祭祀は正月二日飛馬神事と、七月四日の身逃神事と、十月十七日の神在祭と、十一月中卯日の新嘗祭等で、祭禮は三月一日八月一日の二回である。
- 3 宮司は、天穗日命の子孫（代々出雲の國造である。）たる千家氏と北島氏（命から五十四世の宗家の時、其の弟が別に家を立てた。）とであつて、共に血統の正しい舊名門家である。現に兩家とも男爵で華族に列してゐる。

第六十五圖 坂出の鹽田（第八十五頁）

一、主眼

香川縣坂出の鹽田及び製鹽家屋を觀察せしめ、瀬戸内海に於ける極盛、製鹽業の全般を推想せしむ。

二、解 説

- 1 本圖は香川縣丸龜の東北岸、綾歌郡坂出なる大濱鹽田の一部、鹽專賣支局の前面鹽田を描寫したものである。
- 2 一面に見えるは鹽田。其の前方の西洋建は鹽專賣支局で中央に立てるは事務所。其の左右は倉庫。向つて左方の屋は、鹽をたく釜屋である。其の外には煉瓦造りの煙突及び跳釣瓶がある。
- 3 海水を蒸發させて製鹽の原料を採取する場所を鹽田又は鹽濱シホハマといふ。鹽田には入濱鹽田と揚濱鹽田との二様がある。

入濱鹽田で行ふを入濱法といふ。それは、遠淺の海邊入江（浪靜かな適當の場所）に堤防を設け海水の浸入を防ぎ内部を田圃のやうに區劃し、其の一町歩以上二町歩以内を以て一軒前即ち、一釜屋分とする。（本圖は此の種の鹽田で左方の鹽釜屋一帯及び、前方の支局、一帯は其の堤防である。鹽田を見れば溝によつて整劃してあるが、あの一整劃連續が一町歩位で躍釣瓶と跳釣瓶との間が一釜屋分である。）此の田面には八間毎に海水を引き入れる可き溝が設けられてある。大なるを本溝小なるを間溝といふ。本溝の深さは一尺六七寸で所々に海水を汲ひこる可き場所がある。間溝は深さ六七寸で水汲場の設けがない。此の溝と溝との間には凡そ八間置きに沼井ヌマリとて砂に附着した鹽分をこし取る設備がしてある。此の沼井は臺ともいふ。（圖の鹽田中、列をなして、砂土の積推されたるはそれである。）

ある。

鹽田の地盤は其の上層五六分の間は土質緻密柔軟の砂土で吸収力に富んだものがよい。其の下層は貝殻砂礫を混じ、更に下方は粘土砂土が良い。若し、砂の表面が粗で間隔が多かつたならば吸収力が弱いから「ならし」柄振又は引板を使つて鹽田面を引き廻り、砂を地盤に密着させ、夜間鹽分を此の砂に十分吸収させるのである。天氣晴朗であれば早朝から是れを掻き起して、砂中の水分を蒸發させ鹽分のみを殘留させる。之れを引濱ヒキハマといふ。（圖中二名の男が作業してゐるのは是れである。）引濱の方法は馬鋏ウマノコといふ熊手様のものを以て鹽田中を引き廻す。最初に横鋏を引く事一回、左右より中鋏を引く事二回、角鋏を引く事二回、都合五回掻き起す。かくて水分蒸發し、鹽分が砂に附着したならば持濱モチハマとて此の砂を集め、沼井に運び入れ、鹽田の本溝から海水を運んで注ぎかけ、砂周の鹽分を溶かす。その鹽水は濾過されて、沼井の傍なる鹹水溜に入る。此の濃厚なる鹹水は、突返ツキカヘと稱して、送水装置のタンク中に運び入れる。タンクからは、鹽入井に這流する。之れを釣瓶に依つて汲み上げ、鹽釜屋内に送り、鐵製の大鍋で水分を蒸發させ、鹽を殘留させるのである。（圖中左方の煙突から煙が出てゐるのはあの鹽釜屋内で鹽を殘留させてゐるのである。）

- 4 揚濱法は我國の日本海方面の如く海濱内灣遠淺に乏しい、且潮汐干満の差僅少なる地方に行はれる。石川縣、新潟縣地方の鹽田は是れである。多くは、天然の砂濱を利用し、或は粘土質の地盤を搗

き固めて水の浸透を防ぎ、恰も水田の如くにし、茲に細砂を散布する。其の製法細説は不必要であるから略す。

三、活用

- 1 挿繪の觀察及び教師の補説に依つて製鹽法の大要を知らせよ。
- 2 海濱生産業の一たる製鹽法を知らせると共に其他の海濱生産の方策を示教せよ。
- 3 何に故、瀬戸内海一帯の沿岸に製鹽業盛んにして、しかも多額なるかを考究させよ。而して産業と天然氣象、自然地形との關係を明らかにせよ。(かくすれば、地圖により、地方の事情に依つて、其の地方の産業状態を推想し得る訓練をなす事が出来る。)
- 4 全國の鹽生産額に就いて。
 - (イ)鹽田總反別——五、八八一・三町步。煎熬釜數——六、四〇三。製造高——一、〇三四、一五八、八五五
 - (ロ)十州鹽田——播磨、備前、備中、備後、安藝、周防、長門、阿波、讃岐、伊豫の十國。
 - (ハ)鹽田二百町步以上を有する地方。

地方	段別	數	地方	段別	數
山口縣		一、三一四・五町	兵庫縣		九〇九・二町
香川縣		九三九・〇町	廣島縣		七一四・七町

岡山縣	四七二・一町	福岡縣	三四三・一町
徳島縣	四六九・九町	全國	五、八八一・三町

(ニ)重なる産地。

地名	産額	地名	産額
坂出	三〇四、一二三、五三七斤	味野(岡山)	一〇一、八〇八、一一七斤
三田尻	一八五、七三九、五八七斤	撫養(徳島)	八七、三一〇、三八一斤
赤穂(神戸)	一三三、二五四、八七六斤	福岡	三八、二七五、七五〇斤
尾道(廣島)	一二八、五八一、三二〇斤	名古屋	二三、二二五、九〇六斤

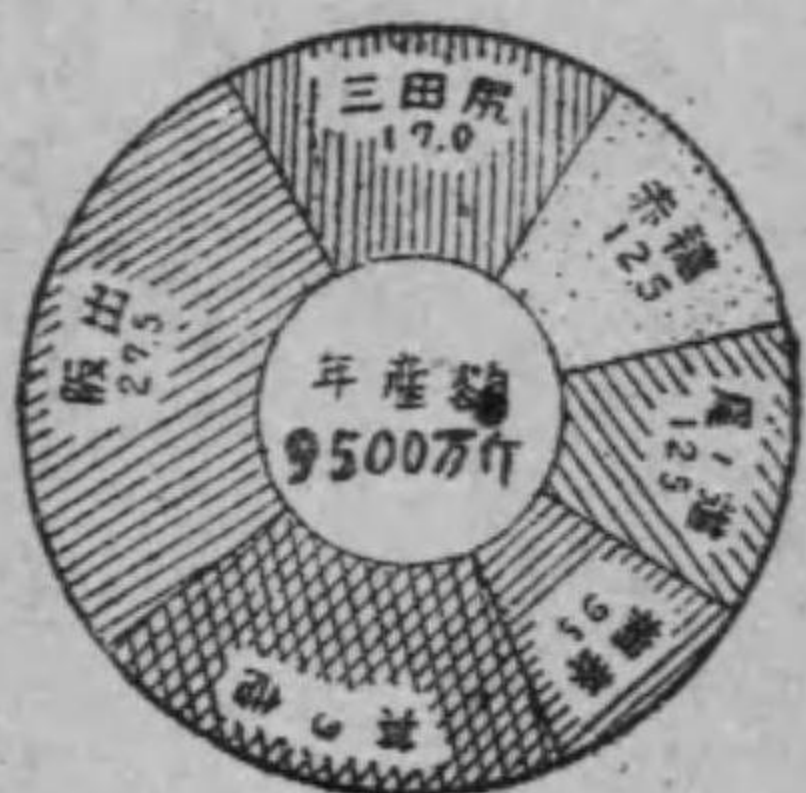
此等の表を用ひて、瀬戸内海地方の鹽生産状況を具體的に授知せよ。

第六十六圖 鯉節製造と鯉釣 (第八十六頁)

一、主眼

鯉節製造の實況と鯉釣の模様とを觀察させ豊富なる海産物の獲集と

内地主産地



之れが製造物の多額について想像させる。

二、解説

- 1 本圖は、高知縣幡多郡清松村某家に於ける鯉節製造の實況である。尙右上方矩形處は、土佐灣内同地方に於ける鯉釣の實況の一部である。
- 2 風波靜かなる海上に浮べる一和船は、釣船で船上に見える幾多の人は漁士である。漁士は竿を手にし、糸を海水に垂れて、今や鯉釣りの真最中である。向つて左方、船の先の曲れる竿を見よ。是れは今鯉魚を釣り上げんとする處で、其の直下海上に魚の見えるのは鯉である。
- 3 下圖に就いて、
 - (イ)本圖は鯉を削つて後の操作を示したもので、鯉節製造の後半に過ぎぬ。
 - (ロ)圖の中央前方に於て、籠を肩にし、向ふに行きつゝある人は削つた鯉を日乾場に運搬して居る所である。前面は日乾場の一部である。
 - (ハ)其の左方、此方に向ける人は削つた節を日乾場に並べてゐるのである。節は削つた後一二日間日光で乾燥し、其の後、箱又は樽に詰めて、徴付するのである。
 - (ニ)更に其の左方腰を曲めてゐる人は、鯉節繩がけ荷作り中である。箱の重さは十貫匁。
 - (ホ)其の左方肩に箱を擔いで、此方に向つてゐる人は、出來上つた鯉節の荷造り箱を運搬してゐるのである。

である。

- (ヘ)又其の左方ハツビを着た人は、日乾の終つた後、槽に積み込みつゝある所。斯くして徴付するのである。槽は直径六尺、高さ四尺餘である。
- (ト)最も此方の右方に腰を曲め、四つ這ひの姿の人は、貯藏中の鯉節を日乾してゐる所。無數小形の船形は仕上げられた貯藏鯉節である。此の貯藏鯉節は半月又は一ヶ月に一回以上日乾し、害虫を防ぎ、香味を保存するのである。但、此の際徴を擦り落すは不可である。徴を以て節を包む事は甚だ必要である。
- (チ)前面、斜傾の區劃された棚臺は、節の乾燥中である。その傾斜せるは、南面せしめて、比較的日光を直射せしめんためである。
- (リ)作業せる人の後背家屋の側に數段高く積み重ねられたるは鯉節を入れた箱である。
- 4 漁季は春四月頃から秋の間であつて、春を上りかつを、秋を下りかつをといふ。土佐では、足摺崎津、室戸岬沖が最も多くを産する。
- 5 鯉をとるには、網を用ひる事があるが、主に竿で釣る。其の方法は挿繪にも見えるやうに、二間半乃至三間位の竿に縞絲二間半許りを附け、其の先端に活きたる鱈を餌として用ひ、海水中に垂れるのである。若し魚が群集してゐるならば、擬似的鉤を使用する。

漁船には發動機を据る附け、三四十人乗り組み、黒潮に接近する所まで（普通十五哩位沖まで）魚群を捜り釣るのである。

6 鯨節の製法。

庖丁で頭を切り落とし、腹部の肉をも去り、次に身卸庖丁で脊骨の右と左とに切つて、三枚とし、更に肉の中央部背骨の邊から縦に兩断する。で其の背の方を雄節といひ腹の方を雌節といふ。身割の後煮籠（竹製）に萱を敷き、其の上に丁寧に並べる。（籠立といふ）次いで大釜の湯の沸騰せる中へ、五六枚の籠を入れ、一時間半位煮熟する。かくて取り出したならば、清水の満された骨拔盥に浸し、小骨を抜き、皮を去り、蒸籠に並べ、あま又は焙乾室で燻乾する。凡そ一週間の後、削つて形を整へ、次に、一週間程樽又は箱に入れ、或は簀巻にして青黴を出す。

青黴が出たならば、一二日間日乾し十二三日間燻付をし、再び日乾の後製了する。其の後の手續は圖に見えて居る順序に従ふ。

三、活用

- 1 鯨釣船の多忙なる有様を観察させ、高知縣の海産について其の活潑の程度を想像させよ。
- 2 挿絵について、精細に鯨節の製法を説明し、製法の大要を了得させよ。
- 3 鯨と海流、氣温との關係を考へさせよ。

4 鯨は我が國に於て鱒に次いで的重要産物。

鹿兒島縣	一、二九一、七二一	靜岡縣	一、六七二、三六五
宮城縣	四九二、三二〇	鹿兒島縣	一、五四〇、五六八
高知縣	四一九、六七七	愛媛縣	六五〇、一五三
茨城縣	三四〇、五七七	福島縣	五九三、六二二
全國合計	四、六四二、九〇五	全國合計	七、七二九、八三〇

水産總額、 四二八萬圓（漁獲高、二八二萬圓。製造物、一〇〇萬圓。遠洋漁業、四六萬圓。）

鯨節	七〇萬貫	鯨節	六三萬貫
珊瑚	三〇萬貫	鯨節	二二〇頭
節	二千萬貫	其他	三九萬圓
節	一八萬圓	其他	二四萬圓
節	四六萬圓	其他	一四四萬圓

鯨節の販路、
六割以上は大阪に、
次いで、京都、神戸、東京市。

四、參考資料

土佐は、古來半紙の名高く、從來は戸毎に手すきをしてゐたが、今は動力使用の大工場も出來、盛んに製造してゐる。中にも高知の西方伊野町及び接續村旭村には大なる製紙工場があつて、大阪に移出してゐる。

其の産額は約四五〇萬圓。日本一である。

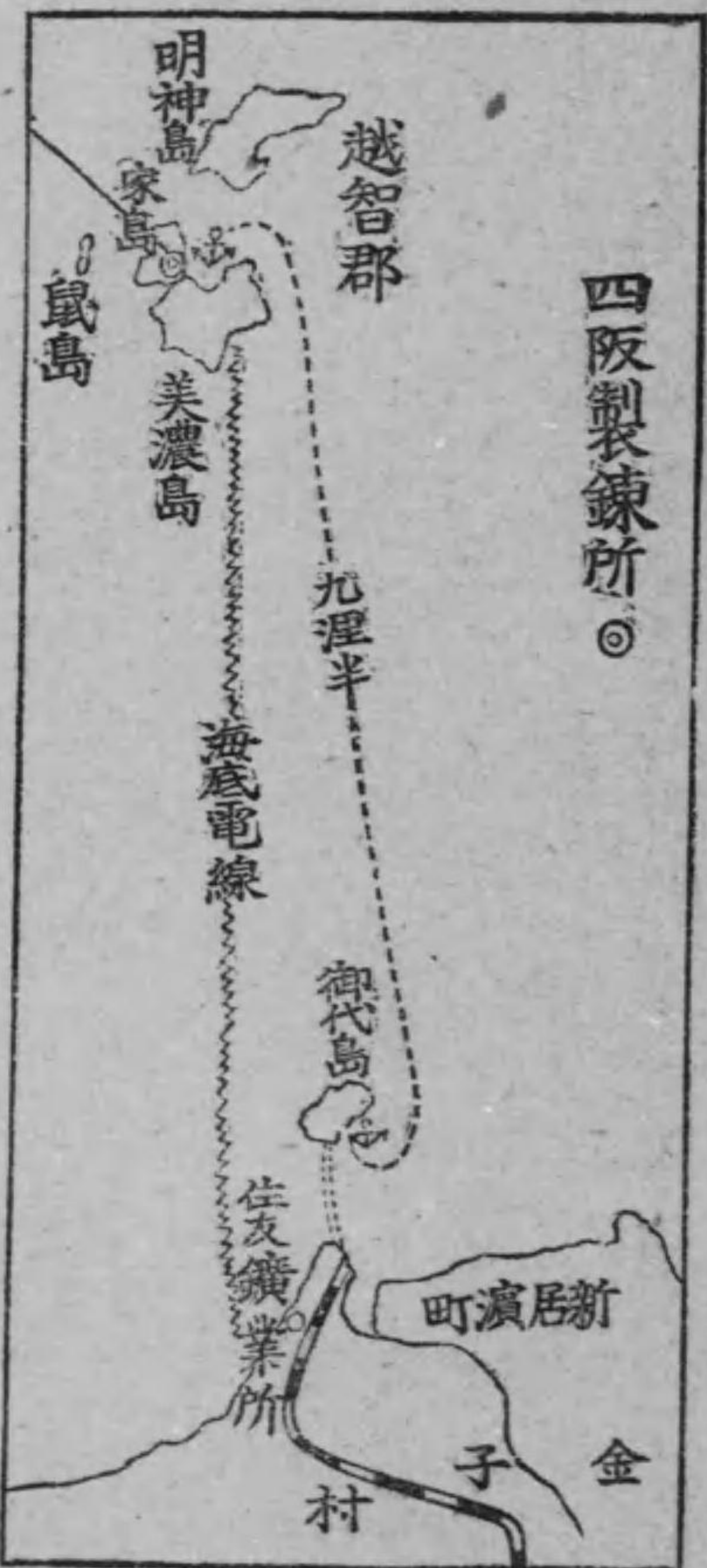
第六十七圖 四阪島製鍊所 (第八十七頁)

一、主 眼

黑白の煙濛々天を覆ふ四阪島製鍊所の盛大なる全景を觀察させ、伊豫別子の銅の生産状態及び四阪島製鍊の盛況に就いて知らしめる。

二、解 說

- 1 本國は、大阪の住友吉右衛門氏の經營に係る別子銅山別子附屬製鍊所——四阪島製鍊所を東方美濃島から眺めた實景である。
- 2 四阪群島は伊豫新居濱から海上九湮半の越智郡宮窪村にある。主なる島には、美濃島、家の島、鼠島、明神島などがある。全部住友家の所有で戸數一千三百、人口五千二百内外。製鍊所(即ち本圖)



四阪製鍊所

は家の島にあるが機械製作修理場、事務所、小學校、其他の住宅は美濃島にある。

⑧ 圖の中央前方白煙濛々として出づる七基の煙突は何れも熔鑛爐の煙突で、最長のもは二百十四尺の高さを有つてゐる。此の煙突の左方に放射狀に三線の下れるは鑛石の捲揚をなす所謂インクラインである。向つて左

の新居濱から鑛石を積んで來た曳船が碇泊してゐる。前方の烟の出て居ない煙突は煙塵室、其の左は汽罐室、最左にある

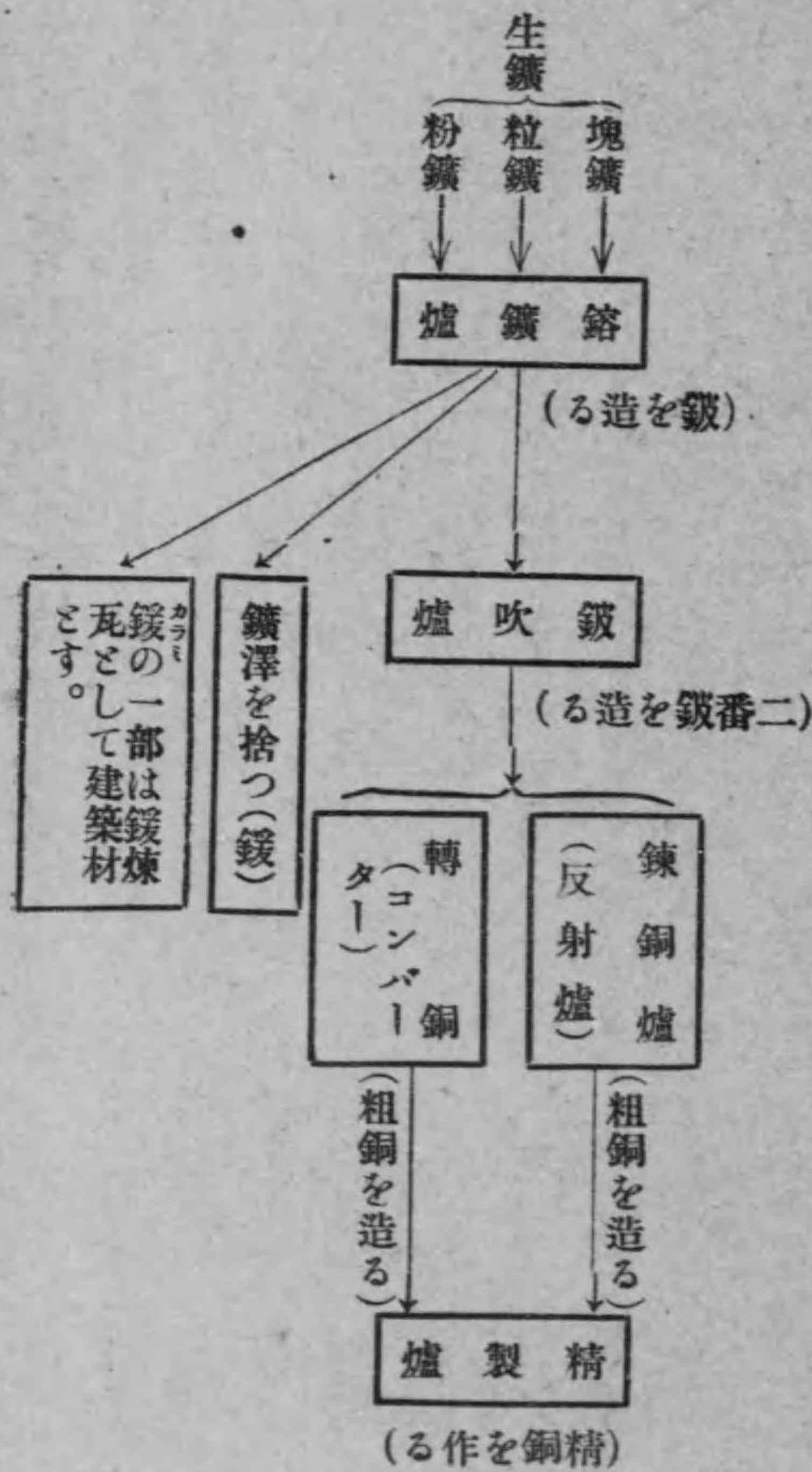
は鍊銅所及熔鑛爐の煙突である。其の左に續く工場はコークス製造所、精銅を作る精製部、粗銅を作る鍊銅部等である。其の手前の大なる建物には熔鑛爐が數臺ある。

コークス製造所の向ふに碇泊せる一大汽船は九州から石炭を搭載して來たものである。本圖の右方一帶は製鍊爐及附屬工場である。

4 前方海中に見える島は鼠島で火葬場及び墓地がある。

5 本島人口中二百名は役員二千名は労働者、他は其の家族。労働者は全国から集つてゐるが各人も温順で、島には衛生、防火等の設備が備はり、役員俱樂部、劇場、調度課、販賣部等がある。飲料水は大人一日の定量一斗二升、小人は其の半量を以て新居濱から曳船で運搬してゐる。實に本島は別天地である。

6 生鑛の一部は焼吹法で処理する。即ち、焼鑛窯に填充し、之れに石炭を加へて點火し、焼成した焼鑛は更に熔鑛爐に送り、骸炭を使つて溶解せしめるのである。かくて生成したる生鍍は鍍と共に前床に流入せしめ、鍍は其の上口から間断なく鍍壺に流入せしめ、此れを海岸に運搬して海岸埋立の用に充てる。而して、生鍍は時々其の下口より抜出して砂型に入らしめ、放冷の後手工を以て之を適當の大きさに破碎し、更に之れを生吹法に附して品位高き生鍍を得、再び適當の大きさに破碎したる後、之を焼鑛窯に填充し、焼成したる焼鍍は此れを鍊銅爐に送り、骸炭を用ひて溶解せしむるのである。因つて生成したる鍍は骸爐内坩堝の上口より間断なく鍍壺に流入せしめ、放冷の後破碎して熔鑛爐に送り再び溶解に附する。鍊銅鍍は即ち是れである。而して該坩堝に貯藏する所の稠密鍍は時々其の下口から抜出して前床に流入せしめ、更に其の表面から鼓風を送つて酸化せしめて生成する「ドブ」を除き、粗銅を製出するのである。此の粗銅は之を反焰式精銅粗銅爐に装入し、酸化還元の兩作用を受け



しめて生成する「ドブ」を除き、精銅を製出するのである。

7 又、生鑛の一部は生吹法によつて処理するのである。即ち、生鑛を熔鑛爐に装入し、少量の骸炭を使用し、主として鑛石所含の鐵及び硫黃の酸化熱を利用して溶解せしむ。かくて、生成したる生鍍は前と同じ法にて製鍊するのである。

8 四阪島製鍊業順序。

三、活用

- 1 製銅所の宏大壯観なる事を納得させよ。その爲めには精細なる観察を要する。
 (イ) 烟突の數と烟の量。
 (ロ) 小島と雖も全島を覆ふて尙ほ狭しとする廣大なる工場。(運送船、人家、電柱等と比較して工場の大なる事を知らせよ)、
 (ハ) インクライン。
 (ニ) 活氣旺盛せる四阪島。
- 2 解説に於て述べたる本圖の解説と製鍊方法を對照し、本製鍊所の製鍊順序次第を挿繪によつて納得させ、
 (イ) 製銅には多數の勞力と時間と手續とを要すること。
 (ロ) 複雑なる製銅法も秩序整然として迅速になさるゝ文明開化の恩澤。
 (ハ) 四阪島製鍊所の製成能率。
 等に就いて教示せよ。
- 3 愛媛縣の鑛物の主なるものは銅及び安質母尼である。銅は全縣を通じて八十有餘の銅山を有し、年産額千五百萬斤以上に達して居る。

四、參考資料

1 別子鑛山。

海拔四千三百餘尺。採鑛面積八萬坪。地質は晶質剝岩系で石黒剝岩、綠泥剝岩、紅簾剝岩、石英剝岩からなつて居る。鑛床は厚さ十尺乃至二十尺で層狀は斷層のため階段狀をして居る。鑛石は黃鐵鑛に黃銅鑛の混じたもので其の品位は百分中四乃至八の銅を含んでゐる。鑛石採掘法は正階段掘で、専ら手掘法を用ひて居る。坑道開鑿には手鑿又は「ライナー」「シユラム」等の鑿岩機を使用する。選鑛所は角石原及東手にあつて、鑛業所は新居濱、製鍊所は、元新居濱にあつたが鑛毒の煙突をさけて今

秋田縣	三〇、四一五、七三八	大阪府	一〇、一九〇、九三八
栃木縣	二五、一〇〇、〇三九	青森縣	四、九九八、五七二
茨城縣	二三、〇三四、四七四	兵庫縣	四、九七九、二三五
愛媛縣	一九、五四七、五一六	巖手縣	四、六〇二、〇一九
岡山縣	一四、四五〇、八七八	全國合計	一六七、七二五、八六九

こんな表を示したり、挿繪の盛況から想像させて、愛媛縣の豊富なる鑛業に就て知らせよ。

4 製鍊所と海中の島、製鍊所と農産物、人生との關係等に就いて問答せよ。解説にも述べたやうに新居濱からわざ／＼一人宛一斗二升の水を運搬して迄此の島に於て製鍊することは、兒童にとつて不審をもたらすべき一項ではあるまいか。

は四阪島の家の島に移された。鑛石は山の中腹にある上部鐵道に依つて石ヶ山イシヤマ夫ウヂヤウに送り、同所から索道に依つて悉く端出場に送り、それから下部鐵道で北方新居濱に輸し、茲から曳船で毎日三回宛四阪製鍊所に送つて居る。

2 別子銅山最近の産出高は一千六百三十萬斤で是れ等の精銅は一度神戸に輸送し、改めて、諸外國に輸出する。或は大阪の造幣局に送られて貨幣の原料とする。

東京二重橋外の楠公銅像は住友男爵が此の山の銅を以て、鑄造寄進したものである。

3 市の川鑛山。

發掘の起元は古いが今日に至るまで幾度の消長があつた。近時歐洲大亂の勃發に伴つて、アンチモニーの需要増すに及び、俄然として盛況を呈するに至つた。

アンチモニー産額は二十二萬貫で日本第一である。

第六十八圖 高松と屋島 (第八十八頁)

一、主眼

良港高松市と勝地屋島との地形風趣を觀察させる。

二、解説

1 本圖は高松市の西方丘上から高松市を隔て、屋島を眺めた所である。

2 挿繪の中央此方から進んで居るのは多度津方面から來た汽車である。此の鐵路の左方は鹽田で右方は高松市街である。

前方の森の如く黒く見ゆるは玉藻城(高松城)で松平伯の御宅がある。

右方海中突出せるは築港で林立せるは橋である。港内は八萬坪で四國第一の良港である。海の彼方より、港さして來るのは、岡山縣宇野と高松市間の連絡船玉藻丸である。

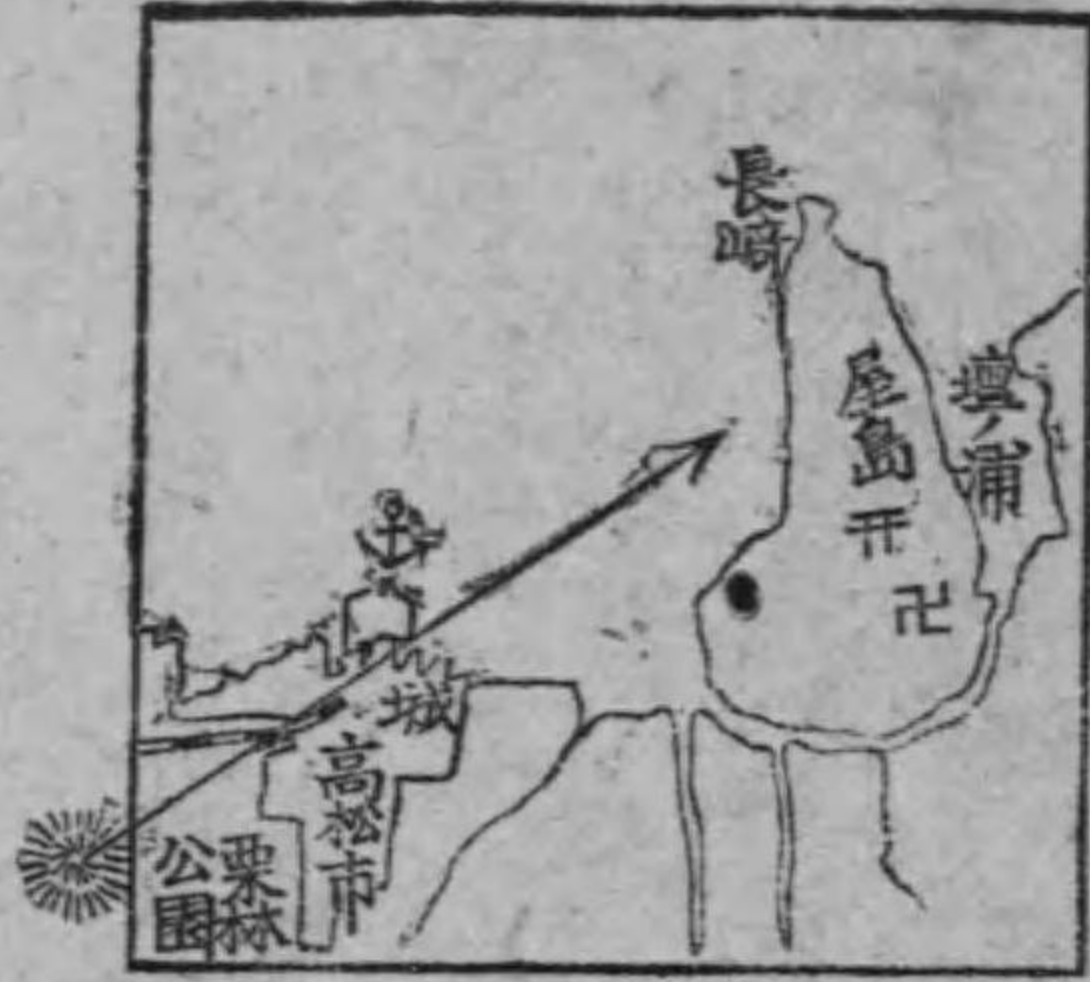
海を隔て、彼方に見える屋根狀の島は屋島である。

3 高松市は瀬戸内海に臨み、地勢南西に丘陵を負ひ西に狭く東に廣い。陸には讃岐鐵道が通じ、港は築港されて、大阪、神戸、宇野、糸崎、下關を初め瀬戸内海の各港に汽船が往來してゐる。

實に中國との連絡點であつて、水陸交通の要衝である。當市は初め八輪島といひ、天正年中生駒近規封せらるゝや此の地をトして城を築き高松城と名づけた。後寛永年中、松平氏代りて移封せられ維新に及んだ。

今は縣廳を始め、諸學校官衙が設けられた。人口四萬五千。築港の設けがあるから百貨輻輳し、商業

高松と屋島



般販。市の西南方に栗林公園がある。市の産物としては、漆器、保多織、燐寸などである。

4 屋島山の風景は日本屈指の者であつて、登路十町餘。山は南北に長く屋宇の形をなし、其の東麓は源平の古戰場たる壇の浦である。

屋島浦は其の東北一帯の海岸で、後は屋島山峙ち、前は海灣を隔て、庵治の半島と相對し、山光水色二つながら備つてゐる。元暦二年源平の決戦せし所、眞言宗屋島寺の古刹、沿岸安徳天皇宮跡、繼信の碑總門、駒立石、景清鍛引の舊址等を見る事ができる。山頂は眺望絶佳で西方海灣の弓弦の如き間に高松市の瓦葺粉壁、築港の石堰を擁して、宛然畫のやうである。

三、活 用

1 挿繪の觀察に依つて、

(イ)高松港の良港にして交通の要衝なること。

(ロ)屋宇形屋島の風光雅趣に富むこと。

等を味はしめ屋島に關する風光佳景の話をなせ。

屋島浦、

江村宗岷。

漢々風烟落日愁。

征鞍弔古下寒州。

沙場自傍青山遠。

海水空縈孤島流。

萬壑峰巒宮殿盡。

長汀寂寞甲兵收。

潛然相憶舊時淚。

況又不堪蘆荻秋。

昔千年屋島のいくさ今にござんす畫にかいて

(俗 謠)

2 「此の山は元と一の離島なりしも今は陸地に接続せり。其の形屋宇に似たるが故に屋島の稱あり。地質は火山岩より成る。古は天智帝此に築城し、瀬戸内海の防禦となし給ひしことあり。嘉永二年平宗盛幼帝を奉じて此の地に到る。阿波豪族田口成能之れに應ず。四國を徇へ行宮を建つ。翌年山陽定まるを以て、帝を攝州福原に移し奉る。二月福原陥り、又帝を奉じて屋島に還る。義經風波を侵して、大阪灣を横ぎり、阿波より山を越えて此の國に入り、遂に之を陥る。平家悉く西走、亦馬關に走る。山上八島寺あり、頂上より展望すれば大小無數の島嶼其の前に散點し、左には高松市を望み、右には八栗山を眺め風光實に絶佳也。」

3 此の挿繪を使つて、源平戦の戦址順路の大要を知らせよ。或は、此の挿繪を平面圖に描き改め、(教師が示すのもよいが、此の挿繪から想像させて、兒童をして描寫させて見る。)市街及屋島一帯の地形を明確にせよ。

4 若し、屋島の附近にして、修學旅行をした事があれば、此の挿繪を使つて、紀行文的の短文を作らせるも面白い。

四、參考資料

1 高松築港

明治二十八年計畫し、五年後同三十三年竣成す。本突起は西にあつて長さ三百五十間、幅五間、其の外側には高さ四尺の防波堤を繞らしてある。東方突起は長さ二百七十五間、幅二間、平均干潮十四尺の水深を保つ。本築港内には、長さ九十間幅十五尺の浮槽三箇を設け、棧橋を造り、船客の上下貨物の出入に便してゐる。

2 栗林公園

市の西隅、栗林村にある。此の庭園は二百年の昔延寶中藩祖松平頼重の勅建したものである。四世の孫頼恭、延享中に之れを修治し、今日に及んだのである。紫雲山が其の南に聳え、西湖南湖以下六箇の池水と飛來峯巾子峰以下十三箇の山陵とを以て成り、老樹鬱蒼、木石凡て奇、真に天下の名園である。

尋常五年地理 挿繪活用教材解説取扱法 (終)

大正八年五月一日印刷
大正八年五月十日發行

尋常五年地理 挿繪活用教材解説取扱法
(定價金壹圓八拾錢)

著者所有

著者	木山淳一
著者	奥山禱太郎
發行者	東京市京橋區南橫町十八番地 大倉廣三郎
印刷者	東京市麴町區有樂町二丁目一番地 吉原良三

發行所

東京市京橋區南橫町十八番地

廣文堂書店

振替口座東京四六八四番 電話京橋二四六三番

廣文堂發行理想的敎育書目錄

東京高等師範學校教授大瀨甚太郎先生著
教育の心理學
 菊判布製全一冊
 送料 金貳圓八拾錢

高島平三郎先生著
兒童心理講話
 菊判布製全一冊
 送料 金貳圓七拾錢

坂庭清一郎・萱場柔壽郎先生共著
新植物語
 菊判布製全一冊
 送料 金六圓

文學博士小西重直先生閱
 小田原分監長 黑田源太郎先生著
犯罪少年の告白と個性調査
 菊判布製全一冊
 送料 金貳圓八拾錢

東京高等師範學校教授保科孝一先生訂
綴方指導の實際
 菊判布製全一冊
 送料 金壹圓五拾錢

理想の敎育授書目錄

目書授教育教的想理

廣島高等師範學校訓導 山本孫一先生訂
修正新教科書 教授日案兼用 各科教授細目

尋常一年修身教授細目	尋常一年算術教授細目	尋常一年讀方 <small>(第三卷第一卷二)</small> 教授細目	尋常二年修身教授細目	尋常二年讀方 <small>(第三卷第三卷四)</small> 教授細目	尋常二年算術教授細目	尋常三年算術教授細目	尋常五年地理教授細目	尋常五年地理教授細目	尋常六年地理教授細目	尋常六年理科教授細目
送金料六金十六錢	送金料六金十六錢	送金料六金十六錢	送金料六金十六錢	送金料六金十六錢	送金料六金十六錢	送金料六金十六錢	送金料六金十六錢	送金料六金十六錢	送金料六金十六錢	送金料六金十六錢

目書授教育教的想理

鹽原幹雄先生著 <small>(尋五年用、尋常六年用)</small> 新定小學地理教材及教授法の研究	宮城縣師範學校教諭野口吉郎治先生著 高等小學地理實際的研究	滋賀縣山東農學校教諭富矢喜一先生著 一坪農業施設の實際	中村俊治先生著 日用理科學の常識	東京女子師範學校訓導田中萬吉先生著 カード式系統的暗算練習教程
菊判布製全二冊 送料各金壹圓八拾錢	高等一年用、高等二年用 菊判布製全二冊 送料各金壹圓五拾錢	菊判洋綴全一冊 送料金壹圓五拾錢	四六判洋綴全一冊 送料金壹圓五拾錢	洋綴函入全一冊 送料金參拾五錢

目書授教育教的想理

- 三澤隆茂先生著
魔術的物理實驗法
 四六判布製全一冊
 送料金八錢
- 青山師範學校訓導宮内與二郎先生著
 教授案を主とせる
學年別各科教授法
 (尋一・二・三・四年用全四冊)
 各金壹圓貳拾錢
 送料各金八錢
- 大川義行先生著
初學年兒童取扱法
 菊判洋綴全一冊
 送料金八錢
- 富山縣師範學校附屬小學校編
 文部省編
遊戲詳解及取扱法
 菊判布製全一冊
 送料金拾貳錢
- 東京高等師範學校教授津崎亥九生先生著
實驗體操教授法
 菊判布製全一冊
 送料金八錢

目書授教育教的想理

- 奈良女子師範學校教授豐田八十代先生著
讀方教授の研究
 菊判洋綴全一冊
 送料金八錢
- 滋賀縣師範學校主事山口德三郎先生著
書方教授の研究
 菊判洋綴全一冊
 送料金八錢
- 川部俊藏先生著
 發見創作
 安全簡易
兒童理化實驗法
 菊判布製全一冊
 送料金八錢
- 東京府女子師範學校教授佐藤義和先生著
各科教授板書の研究
 菊判洋綴全一冊
 送料金八錢
- 鹿兒島縣師範學校教授松下友一先生著
各科教授主眼點の研究
 菊判洋綴全一冊
 送料金八錢

目書授教育教的想理

川部俊藏先生著
遊戲的理科實驗法

菊判布製全一冊
 送料金八錢

小倉師範學校教諭佐藤平太郎先生著
圖案作畫新教授法

菊判布製全一冊
 送料金貳圓參拾錢

東京青山師範學校訓導宮內與二郎先生著
國尋常定小學算術教材及教授法の研究

菊判布製全一冊
 送料金參圓五拾錢

國高等定小學算術教材及教授法の研究

菊判布製全一冊
 送料金壹圓五拾錢

富山縣師範學校主事澤正先生著
小學校教育教授の實務

菊判布製全一冊
 送料金壹圓五拾錢

2636
50

2

終

